

## 天保九（一八三八）年 幕府巡見使への対馬藩対応（一）

### ― 宗家文書『巡検上使記録 御勘定奉行所』―

森 弘 子  
宮 崎 克 則

#### 解題

天明七（一八七八）年から五〇年間、十一代将軍を務めた徳川家斉は、天保八年（一八三七）四月、家慶（四五歳）へ将軍職を譲る。当時、将軍の代替わりから一年以内に、旗本たちが巡見（巡検）使として全国に派遣された。

将軍代替わりの予定は、天保六年十一月に幕府老中から伝えられた。対馬藩の江戸詰であった杉村但馬は、同年十二月三日付で書状を国許の年寄（家老）へ送り、代替わりの「御内沙汰」があったこと、そのための心得を求めた。そして同七年四月には、藩内で幕府巡見使への担当者が決められ、準備が進められていく。ここで紹介する史料は、勘定奉行所がまとめた記録である。

対馬藩の記録である「宗家文書」（長崎県対馬歴史研究センター蔵）には、全十七冊の『天保巡検使記録』（巡検A一一

六(一三三)がある。これは、藩内各役所から提出された記録をもとに、項目ごとに編纂したものである。その項目を列記すると、

- 一番 諸用意并諸役人附御帰帆後取調共
- 二番 諸役々え相渡候条書并覚書共
- 三番 御郡役之伺并返答、且田舎役々御答書
- 四番 町奉行并返答、且御答書
- 五番 御勘定奉行より之伺并返答
- 六番 与頭大目付御船奉行御馬役人馬役御用達、其外諸番ヨリ之伺并返答
- 七番 公儀被仰従上使御達、且於江戸勝本差出候書付
- 八番 上使御着ヨリ田舎え御発駕御留守中、且御帰府御出帆迄府内毎日記
- 九番 田舎御巡検中毎日記并往復書状控
- 十番 依御尋御答并不時御尋答
- 十一番 上使より御宿亭主其外町役え御尋答并御家中ヨリ之尋答共
- 十二番 諸番所番人飾道具御船飾府内田舎木銭御賄献立上使出火之節御立退御行列附
- 十三番 江戸大坂隣国書状控
- 十四番 江戸大坂隣国往復書状控
- 十五番 府内役々、且田舎御附廻上下附并宿組役々御褒美御称美

となり、全般的にまとめられていることが分かる。順次、これらの記録も紹介していくが、まずは勘定奉行所がまとめた二冊の『巡検上使記録 御勘定奉行所』（巡検C七・八）を紹介する。

巡見使は、旗本三人を一組にして、全国を八ブロックに分けて派遣された。九州ブロックは、豊前・豊後の地域が四国ブロックに含まれたから、筑前・筑後・肥前・肥後・薩摩・大隅・日向・壹岐・対馬の国々であった。九州へ派遣された旗本は、使番の曾我又左衛門、小姓組の大久保勘三郎、書院番の近藤勘七郎であり、それぞれ三〇人ほどの従者を引き連れていた。彼らは、天保九年四月一日に江戸を発ち、東海道を通って大坂へ、そこから久留米藩の迎船で瀬戸内海を渡り、四月二十八日、筑前の福岡藩領若松に到着した。福岡藩領・唐津藩領を巡見し、唐津の呼子から乗船、平戸藩領壹岐を通って対馬に着いた。風向きの関係で、彼らが城下町府中（厳原）に着いたのは、閏四月二十一日の真夜中であり、五月六日に乗船して平戸へ向かうまでの十一日間、対馬を巡見した。巡見使大久保の感想<sup>1</sup>によると、大雨時の崖崩れは「身の毛もよたつ」ほどの恐怖を感じたが、晴天に恵まれると「朝鮮明かに見ゆ」とか、「奥州の松島とも可云景色」とある。また、山がちで険しい対馬の道は、駕籠に「綱引をつけて引上、引おろす」ほどに急峻だったという。

順路の概略を示すと、府中↓大山村↓佐賀村↓琴村↓豊村↓深山村↓瀬田村↓仁位村↓府中となる。対馬は上島（かみじま）と下島（しもじま）に大きく分かれるが、巡見した地域は城下町府中を除くと、ほぼ上島のみであったことが分かる。

新たな将軍の使者として派遣された巡見使に対して、対馬藩はどのような準備をして対応したのか、ここで紹介する史料から具体的に検討することができる。

〔注〕

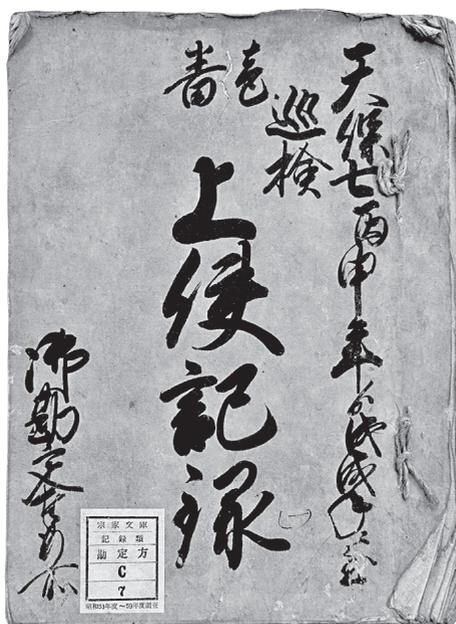
- (1) 天保九年巡見使および従者が記した記録は、すでに史料紹介している。森弘子・宮崎克則「九州へ来た『諸国巡見使』——天保九年巡見使の記録と解説——」(『西南学院大学博物館紀要』四号、二〇一六年)、森弘子・宮崎克則「天保九年 幕府巡見使の従者日記(一)——立野良道『西海道日記』一・二・三・四卷——」(『西南学院大学博物館紀要』五号、二〇一七年)、森弘子・宮崎克則「天保九年 幕府巡見使の従者日記(二)——立野良道『西海道日記』五・六・七卷——」(『西南学院大学国際文化論集』三三—一—号、二〇一七年)

享保二年に派遣された幕府巡見使からの質問と対馬側の回答については、「宗家文書」の史料解説がある(対馬古文書研究会編『幕府巡検使が見た対馬』交隣舎、二〇一三年、同編『幕府巡検使への御返答書』交隣舎、二〇一五年)

凡例

- 旧字は常用漢字にした。但し、固有名詞は残した。
- 「夕」は「ヨリ」、「ホ」は「等」、「而」は「て」、「江」は「え」とした。
- 変体仮名は平仮名に改めた。
- 欠字・平出は省略した。
- 伺いに対する返答として「付紙」があり、「付紙」が頭注に記される場合は△頭注▽と記した。
- 判読できなかった文字は□とした。

- 読点「、」、並列点「・」は筆者による。
- 傍注の（ ）は筆者による注。



表紙

天保七丙申年ヨリ戊戌ニ至  
老  
番 巡検 上使記録  
御勘定奉行所

内題

上使記録

御勘定奉行所

本文

十郎代被仰付

御用掛

平田俊左衛門

黒岩十郎

藤正左衛門

御勘定手代

申十二月七日就旅行被差免

田井測右衛門

西三月七日増人被仰付

小川與一兵衛

内山繁左衛門

與一兵衛代被仰付

繁野源四郎

申十二月七日測右衛門代被仰付

古屋新八郎

源四郎代被仰付

嶋井儀左衛門

来酉年（天保八年）

内沙汰

来酉年、公儀御代替之御内沙汰有之、今度杉村但馬殿より御国同列中江御内状を以被仰越候、御状拜見被仰付、御状写左之通

御代替

以内状令啓上候、今度来々酉年御代替之御内沙汰状末之通被仰出候処、右御慶事ニ付ては、諸国共ニ御当りく之御詞も在之事故、左様余筋ニ為御内知被置候、御慶事ニ差臨、御不咎無之様ニとの御意味ニ相聞候得は、此方様ニおいても、御代替之上ハ前後之御用向、御役義ニ被為取御重大之儀候得は、申迄も無く追々其筋密々ニ相合候様御熟評在之度と存候、官辺之御様子は、権家内御熟意之御方も有之事故、不都束なから追々御模様相考可申進候、先右之段為御心得、得御意度如是御座候、恐惶謹言

未十二月三日

杉村但馬

内府様

杉村右馬助殿

樋口勘ヶ由殿

平田要殿

仁位孫一郎殿

十一月朔日 御沙汰書

内府様御歳も被為重候得は、来々酉年四月御本丸被為移、公方様被遊御隠居、西丸え可被成御移と被思召候、表立候ては追而被仰出候得共、先御内意可相達由被仰出候

右之通御礼至御三家方、松平加賀守、溜詰越前家庶流、御譜代大名、雁之間詰御奏者番え於席々、加賀守申渡、老中列席

十一月朔日 御沙書

御移替御用係 大久保加賀守様

同断 増山河内守様

御留守居

石川左近将監様

松平内匠頭様

同断

御目付

山岡五郎作様

村勢平四郎様

奥御祐筆組頭

大沢弥三郎様

奥御祐筆

荒井甚之允殿

都筑七三郎殿

右被蒙仰候

巡檢上使

仮御用掛

来酉年、公儀御代替之御内沙汰被仰出候付、巡檢上使之儀可被仰出段、先達て江戸表杉村但馬方ヨリ申来居、就夫御用係役々可被仰付之処、今程御留守之儀ニ付、不日相伺候上御用掛可被仰付候得共、先当時仮御用掛被仰付置候付、諸御用意方不相滞様可在精力は勿論ニ候、御下向時節未相知候得共、来秋三来春ニ掛御下着ニ被至候時ハ間も無之事故、既宝曆年之節も前年五月御用掛被仰付、翌年四月御下着と相見候得は、遅速ニ不拘、只今ヨリ万端之御手当方不差配してハ、即今之御時体中ニ以急間之御都合難相立、品ニ依差図を被相待候てハ取調方間後ニ可相成ハ必定之儀、御用筋大切之事候間、銘々役々ニ相関り候筋々、先規之義等ハ勿論、御時勢ニ付而は少分之事たりとも御為筋心付之義は聊も無遠慮、其品々書立差出可被得差図候、以上

四月廿一日

二位孫一郎

田嶋所左衛門殿

大目付中

町奉行中

平田俊左衛門殿

多田左柄殿

箕原九八郎殿

嶋居正左衛門殿

朝鮮方頭取・佐役中

黒岩十郎殿

船改頭取・佐役中

案書役

金田半左衛門

御祐筆

七五三儀兵衛

与頭手代

土居善治

日帳付

大嶋廣吉

上原隆右衛門

御勘定手代

田井潤右衛門

内山繁左衛門

与頭書手

吉川金吾

三浦清七

御郡代手代

五十嵐市蔵

阿比留伊右衛門

中原卯兵衛

御船奉行所手代

国分加右衛門

右は近々巡檢上使可被仰出御内沙汰ニ付、右御用掛被仰付候  
右之通、四月廿二日多田采男ヨリ申来

宝曆年  
寛政年

来酉年、公儀御代替之御沙汰被仰出ニ付、巡檢上使之儀可被仰出ニ付、諸御手当方之義被成御達、就夫宝曆年、寛政年兩例之内いづれ之御形を目当ニ仕、御手当方取調可申候哉、尤寛政年之節ハ諸般御取役御手輕ニ相成候と相見、夫ニ応、御入料宝曆年よりも多分之御減ニ相成居申候、此度ハ如何可被仰付哉、何れ共差図被下置候ハ、追々御用申上候品も可在御座候、可然御御差図奉希候、以上

申五月廿二日

平田俊左衛門

黒岩十郎

賄頭

小田村四郎治

賄掛

井常右衛門

川本茂十郎

作事掛

大浦半左衛門

同手代

扇廣作

寛政年之形

右は近々巡檢上使被仰出御内沙汰ニ付、右御用掛被仰付候、以上

五月廿三日

御勘定奉行所戸田右門

頃日相達置候通、近々巡檢上使可被仰出候御内沙汰ニ付、諸御用意方御時体も違候事故、各預り之筋々御為之儀は無遠慮可被申出候、尤一体之取計方は寛政年之形ニ被準候付、諸同等之義も右之形を以可被伺出候、以上

五月廿三日

二位孫一郎

田嶋所左衛門殿

大目付中

町奉行中 打廻頭共

平田俊左衛門殿

多田左柄殿

箕原九八郎殿

嶋居正左衛門殿

朝鮮方頭取・佐役中

黒岩十郎殿

船改頭取・佐役中

与頭手代仮役

土居善治

右は御巡検使御用掛被仰付置候処、本役三人入廻り二付、御用掛被差免候

与頭手代

古川綾四郎

右代として被仰付候

与頭書手仮役

三浦衛七

右は御巡検使御用掛被仰付置候処、先役三人廻り二付、被差免候

同

古賀儀左衛門

右代として被仰付候、以上

八月九日

御勘定奉行所多田采男

与頭

田嶋所左衛門

右は近々巡検上使可被仰出之御内沙汰二付、右御用掛被仰付候、以上

八月十六日

御勘定奉行所多田采男

町奉行

仁位格兵衛

御勘定奉行

平田俊左衛門

御郡奉行

多田左柄

御船奉行

箕原九八郎

添勘定

黒岩十郎

筆頭添役

扇半右衛門

右は近々巡検上使可被仰出御内沙汰二付、何れも御用掛被仰付候

八月十七日

御用掛

巡檢上使御用掛之儀、拙者引切承り候段相達置候処、杉村右馬助右御用引切被承候付、被得其意、以来伺書等同人え可被相伺候、以上

十一月六日

仁位孫一郎

田崎所左衛門殿

大目付中

仁位格兵衛殿

平田俊左衛門殿

多田左柄殿

嶋居正左衛門殿

朝鮮方頭役中

黒岩十郎殿

船役頭役・佐役中

御勘定手代

田井瀨右衛門

右は巡檢上使御用掛被仰付置候処、当節旅行二付被差免候

同仮役

古屋新八郎

来酉年

右は田井測右衛門為代巡檢上使御用掛ニ被仰付候、右之通被仰付候、以上

十二月七日

御勘定奉行所樋口源正

入用之諸色

御宿々見分

寛政年之通

豆酸郷

来酉年、公儀御代替之御内沙汰被仰出候付、巡檢上使之儀可被仰出段、從江戸表申来居候付御用掛役々被仰付候付、諸用意方不相滞様、先規之儀は勿論御時勢ニ付、少分之事たり共御為筋之儀は無遠慮伺出候様との御事被仰渡、奉得其意候、就夫御郡中御止宿村之儀は、先規之通可被仰付御義と奉存候付、寛政元年以上使之節、御止宿村々別紙帳面差上之懸御目申候、其以来数十年を経候事故、村々御宿并下宿ニ相成候家々之内、及大破居候も可有之、村ニ依候ては今程家数相減居候も可有之、彼是御普請方御手入ニも可在之候間、右御宿々見分之役々被差下、御普請仕様、帳并入目積等被仰付候ハ、入用之諸色用意方等之義前廉ニ被仰出度御事奉存候、尤品ニ依、生木ニて難用儀も可有御座、兎角御宿々見分不相濟候ては諸用意方共ニ可難成、其上此度は御宿拵等猶又御手入ニ可有御座奉存候付、御普請御取掛方被差急被下度奉存候、何れ共御吟味之上、宜敷御差図被仰出可被下候、尤御宿々見分之御役々之義、寛政年ニハ作事掛吉賀分左衛門立会、見分役村田廣右衛門并大工小頭被差下候と留書ニ相見申候、此節も右之通之御役々被差下候御事ニ御座候哉

一、御泊り、且御通り道筋等之義ハ、寛政年之通被仰付御事御座候哉

一、以前ハ、上使豆酸郷え御越被成候得共、近例ハ御越不被成候付、御宿道造等も不被仰付、

佐須郷

御通り道筋

且佐須郷鶴野えも御越不被成と留書ニ相見申候、此度ハ如何可被仰付候哉、御宿々下見分御役々被差下候節、先例之通、私共内をも被差下候御事ニ御座候得は、御通り道筋をも其節見分仕義ニ御座候間、何れとも御差図被仰出可被下候、夫ニ付寛政年ニハ御通り道筋造り之義、地方普請奉行大石治部介、同見習役佐護三郎左衛門・中村繁右衛門道造下知被仰付、表大小姓中之内ヨリ七人、郷夫召仕方証印役ニ被仰付、七曲り佐須坂其外田舎御通り筋道造被仰付段被仰達置候処、其後ニ至右道造之人夫召仕方ニ付、六郷奉役中ヨリ御時体勘弁仕、百姓共相諭、御為筋ニ可相成存寄申出候品在之、則申出候通を以一体之夫高積り立試被仰付、地方普請奉行之面々立会、人数積り立相極申出候ハ、追て被仰達候品も可在御座との御事ニ付、夫々積り立候事と相見、則積高を以て道普請被仰付候義と相見申候、右ニ付私共内よりも罷下、問場縄引等之見分をも仕候義と相見申、此節ハ如何被仰付候哉、其以來最早数十ヶ年を経候事ニて、殊更常々往来不仕道筋も多相聞候得は、諸木之繁茂ハ素り、山坂難所等ハ道筋造替不申候ては難相濟場所々々等可在之、彼是大造之御普請ニ可有之哉と奉存候、御吟味之上何れとも御差図被成下度奉存候、右之外段々相伺候様可仕候、此段為可申上如是御座候、以上

道普請

山坂難所

十一月三日

御郡奉行役所

仁位孫一郎様

御止宿村々

寛政年御止宿

田舎御見分

道筋之義

当四月、公儀御代替被仰出置候付、巡檢上使御下向御取設方之儀ニ付、御郡奉行所ヨリ被申上候書面被成御渡、披見仕候処、郷々御止宿村々御宿并下宿ニ至過半及大破、寛政年御宿ニ相成候家之内、今程無之候家も有之候付、彼是御普請向御手入可相成候間、右御宿見分役々早々被差下度趣ニ有之、見分不相濟候而ハ、木品用意方ハ勿論御入料積立も不相成儀ニ付、御郡奉行所申上之通御宿見分被仰付度奉存候、尤寛政年被差下置候役々御作事頭、且見分役并大工小頭被差下候と相見申候得共、此節は御作事手代咄人同所出張、御勘定手代咄人、大工小頭咄人、外二番手小頭一人被差加被差下度、御郡奉行所ヨリ申上候通、寛政年御宿々之内にて相減居候家も可在之、其比無之家今程建家仕居候儀も可有之候得ハ、寛政年御止宿ニ相成居候村方二も相応之家無之、御普請方強而手入ニ御座候ハ、少々之道法違候とも御手入無之場所御止宿ニ相成候様被仰付度御事と奉存候、尤申上候通被仰付候ハ、此度被差下候見分人、其心得を以見分仕候様被仰渡如何可有御座哉、尚何れ共御賢慮次第奉存候

御付紙

田舎御宿見分として御郡奉行多田左柄、普請奉行古川武左衛門、同手代扇廣作、作事方出張、御勘定手代咄人并大工頭可被差下候間可相達候、御普請向御便利之道、御郡奉行江相達候、普請奉行ニは猶其役所可被申談候

一、上使御通り道筋之義、寛政年之道筋強く荒れ道ニ相成居候場所は、成丈手入相減候様被仰

人夫積り

付候は勿論、是又早々見分有之、人夫積り被仰付度奉存候、就夫寛政年ニハ郷夫召仕方、表大小姓中証印役ニ被仰付候処、六郷奉役中心付を以百姓共相論、御為筋ニ相成候存寄申出、夫高積立候事と相聞、此節も右之取計方ハ御郡奉行所ニも無抜目儀とは奉存候得共、一旦先規之通道造之人夫積有之上、猶又奉役中え応達在之、当時別て之御切迫之此場、何分ニも積立之人夫相減、郷方ニも強く農務ハ差支ニ不相成仕道を付候儀、奉役中心得を以百姓中気服仕候様論達ニ至、郷々少々も御手伝等之人夫罷出候様ニ共相成候ハ、不一形御為筋之次第は多筆申上迄も無之、此段も宜御応達被成下如何可在御座候哉、尤取掛方之儀は御下向之仕合相知候上、道造不取計候ては、又々生茂り荒道ニ相成候儀故、希くは二重ニ不相成候様評議被申上候様、被仰渡被下度奉存知候

右之趣可然御差図可被成下候、以上

西二月

御勘定奉行所

御付紙承届候

作事掛

古川武左衛門

右は御巡検使田舎御宿普請奉行被仰付候

同手代

扇廣作

田舎御普請奉行

右同断手代被仰付候、以上

二月廿四日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

大工小頭

惣八

番手小頭

小田市左衛門

右は御巡検使田舎御宿御普請為見分召仕候段、御作事方より書付を以届在之

酉二月廿六日

詰所

御巡検使御下向ニ付、中村太玄宅此方役々詰所ニ御借上可被成候付、来廿二日役々下見分之事、但寛政年ニは畑嶋最右衛門宅借上ニ相成候と相見、今程松山宇右衛門相住居候所、手狭ニ有之候付、当節ハ御伺申上置候訳ニより、太玄宅御借上被成候事

八月廿三日

府内御宿

一、府内御宿三軒御借調被成候ニ付、御見分として御使者家并平田主計、南岳院江杉村右馬助殿被成御出候付、役々左之通罷越

町奉行

勘定奉行

杉村右馬助殿

与頭

樋口亘理

町奉行

仁位格兵衛

御勘定奉行

平田俊左衛門

吉村儀右衛門

筆頭添役

扇半右衛門

御作事方出張、表御目付

谷織之輔

御作事掛

古川武左衛門

御勘定手代

繁野源四郎

内山繁左衛門

古屋新八郎

下宿

佐護郷

豆酸郷

御作事方出張、御勘定手代

笹葉孫右衛門

御作事手代

扇廣作

大工小頭

番手小頭

同、与頭手代同書ヨリ、寛政年二は罷出候様相見候処、当節は出張不申候事

同、下宿見分として与頭、町奉行、御勘定奉行、御用掛、小役人、年行司立会有之、左之通御

借上ニ相成

豆酸郷草使

重兵衛

佐護郷同

伝兵衛

松井文作

右は御巡検使御下宿

浜町之下モ

平山源助

船付宿

右は御船付宿

亀屋半蔵

崎野屋佐兵衛

大町之下

藤井屋源治

国分町三根草使前住居、足輕文吉伯父改

文兵衛

旅籠仕出し

右は旅籠仕出し屋

浜町之下

山村屋市五郎

郷夫宿

右郷夫宿

口上手控

上使御旅館

巡検御上使御旅館ニ御借上被仰付、御手入無御座家居も可有之候処、御上使毎ニ御宿被仰付候段、千万難有奉存候、就夫一昨廿二日、御支配御方其外御役々御見分在之、御評議之趣承知仕候処、脇々御本陣と違、殊外大破ニ而御入目も太ク相聞、其上家体曲ミ等之御評議向も在之、斯ル御時体向御入目他ニ相嵩候段恐寒仕、自力之一ト通成共即席申上度奉存候処、近年勝手向

御普請

不都東にて口惜奉存候、將又清勘弁仕候処、唯今之家体御普請被下候時、曲ミ形ニ而は、御上使御旅館ト申儀如何敷奉存候間、自力にて曲ミ直取計度大体銀調仕候間、其余御普請被下置御宿被仰付被下候ハ、難有可奉存候、尤私家屋敷は、先祖代相設候節御用場と申儀御達ニ付、難洩難凌比合も他借仕、私ニ売払等不仕義御座候得は、此節之御用乍恐御不繰之御時体仮成ニ仕繰之道も候ハ、自力にて普請仕御用立可申儀ニ候処、前文之通不手届身分相届得不申、曲ミ直之入料自分にて仕候は、素り建具等も骨具御出来被下候ハ、自分にて張上可申、右を自分之寸志と御聞得被下、此節も御宿被仰付被成下候ハ、私代迄も御旅館連続御借上被仰付難有可奉存候、御勝手筋之儀と奉存候、御役所迄御内願申上候間、御評議宜奉願候、以上

南岳院

八月廿四日

南岳院

御勘定奉行所

御付紙

大破之家体

見届候、御巡檢使御宿用居宅御借上可被成、此程役々令見分候処、大破之家体御普請入料大増之積前ニ相見候、然処即今之御時体感服せしめ、曲ミ直し等自力を以出来、建具損シ繕、新規出来之分共張立方、是又於自分張立可御用立段申出、尤之心得方ニ付申出之通被仰付候、此旨可被及通達候

九月

詰所

中村汰玄

右は御巡検使御下向ニ付、役々詰所ニ居宅御借上被成候、此旨可被申渡候、以上

杉村右馬助

九月二日

田嶋所左衛門殿

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

平田主計

南岳院

御宿用

右之両所御巡検使御下向御宿用御借上被成候、此旨可被申渡候、以上

九月二日

田嶋所左衛門殿

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

可被得其意候

町人

松井屋文治

豆殿郷草使

重兵衛

旅籠屋

御船附宿

右は御巡検使下宿

佐護郷同

傳兵衛

六十人

平山源吉

町人

亀屋半藏

崎野佐平衛

右は御船附宿

藤井屋源治

足輕文吉伯父改

文兵衛

右は旅籠屋

町人山村屋

市五郎

右は郷夫宿

右何れも被伺出候通、夫々可被申付候、以上

九月二日

仁位格兵衛殿

多田左柄殿

高崎翼殿

可被得其意候

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

御郡奉行所

郷夫之義可被得其意候

御巡檢使御下向ニ付御馬扱用意方之儀、先ツ寛政年御用意之形を以紙末之通、鞍皆具等ニ至、早々手当可被致候、其内より上使御牽馬用先規之通可被致用意置候、以上

九月十日

杉村右馬助

御勘定奉行所

嶋居正左衛門殿

一、上馬八疋 不足之分は中馬より償候ニして

一、中馬六疋 内壹疋、田舎御附廻り御用達へ御借渡用

以上

上馬

中馬

仁位之浜

巡檢使御通行ニ付、仁位之浜御普請之義、屋棚普請と先例船波戸之仕様帳之段差出申候付、差上之、懸御目申候、屋棚普請は人夫五百人余打掛大造ニ相見申候、船波戸は至て無造作ニ在之、先例も則大船波戸式ツ出来、御通行相済たる事と相見申候得は、此節初而取設候ニも無之候間、今度も船波戸式ツ出来候而相済候様被仰付、如何可有御座候哉、船式艘并ニては不丈夫ニ相見申候ハ、三艘并ニ仕、随分龜相無之様取計申候ハ、先規在之候事故、強て差支有之間舖哉と奉存候、何れとも被仰出可被下候、此段為可申上如是御座候、以上

九月六日

御郡奉行所

杉村右馬助様

船波戸

〔頭注〕御付紙

仁位浜御普請、両様之積帳見届、申出之通船波戸ニて相済候様被仰付候間、不丈夫之義無之様、別て入念出来候様可被取計候、以上

九月十二日

杉村右馬助

御郡奉行所

御勘定奉行所

可被得其意候

巡檢使ニ付、鷄知樽之浜御普請之義、初發地方普請奉行見之積前ニテハ、大分之御入料相掛り候様相見申候付、先ツ当節は屋棚出来御通行相済候丈ニ被仰付度段申上、其通取計様被仰出、猶亦積書等郷方え相達為差出候処、私共存申候より格別御入目掛申候得共、石垣普請より差当御物出募キ方可然と評議仕、右屋棚普請ニ被仰付候様ニ申候、先日申上置候処、與良郷奉役神宮吉左衛門より心付之儀も候哉ニ承り申候付、猶も御入目軽く後々之為ニも宜敷様之仕方候ハ、申出候様相達置申候処、寛政年之度彼之所之普請夫式百六拾人と相見居候得共、此節は參百四拾御増被下、都合六百人之夫飯米被成下候ハ、夫々石垣普請ニ為出来可申、自然六百人より越し候とも、其分は郷方ヨリ償ひ可申之趣別紙之通申出候付、差上之掛御目申候、屋棚普請ニ仕候ても郷夫、大工共ニハ六百六拾人余之積ニ而全体之御入目不輕相見申候処、今度奉役申出之通ニ被仰付候得は、飯米六石切ニテ相済申サハ、渡之普請ニテ外ニ御手入無之而已ならず、後々迄之為ニも相成、旁御使用と奉存候、右場所地欠よりして無之、寛政年比之損とは大成違ニ御座候間、右六百人夫ニ而申出候通、石普請ニ被仰付被下度奉存候、此段為可申上如此御座候、以上

猶以申上候、右之場所大造之御普請ニ付、如何様ニ仕候ハ、御入目相減可申哉と奉存候処ヨリ、毎度御同等申上、御手入之儀奉存候得共、其段は可然御聞得可被成下候、將又別紙奉役書状は外御用向も御座候間、御一覽後御下ケ可被成候、以上

九月五日

御郡奉行所

杉村右馬助様

樽之浜

〔頭注〕御付紙

鶏知樽之浜船付築出之儀、当時御便利之積前を以申出之通、材木を以出来方相達、積書をも被差出置候、然処神宮吉左衛門心付之品等吟味之上委細書を以被申出候趣承届候、石築出しニ相成候得は、後來御手入ニも無之、殊更両段之積書却而石普請之方相減候積ニ相見候間、申出之通六百八人夫を以石築出しニ被仰付候間、出越之分ハ郷方ニおいて相償候様可被相達候、以上

九月十二日

杉村右馬助

御郡奉行所

御勘定奉行所

可被得其意候

鶴野銀山

鶴野銀山、御巡檢使御見分被成候儀も可在之、左候得は銀吹分并鋪口二三ヶ所御見分被成候先例と相見、則享保年ニは鶴野御泊ニ相成、延享年ハ鶏知村御泊り、鶴野御昼休之御手当ニ相成居候処、御見分無之相濟居候と相見候、此節御見分被成候時いつれ之例を被相用御都合可宜哉、吟味之上可被申出候、扱又鶴野御番所を初銀吹場其外御宿ニ可相成村家、例之通役々立会遂見分積書等早々可被差出候、以上

九月十六日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

賄掛

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

多田左柄殿

高崎翼殿

賄掛

川下茂十郎

御郡手代一人

右は御巡檢使御用田舎御借上、早々上中下品位見通難相成、多数之儀二付、御手当差極之為、右之面々急々田舎江被差下候、所々ニおいて一々遂見分帳面ニ仕立、役方え可差出候、此旨可被申渡候、以上

九月十七日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

多田左柄殿

高崎翼殿

得其意、尚又茂十郎江可被相達候

被差下候人柄、早々可被申出候

御船附宿

御船附宿 町人

崎野屋佐兵衛

旅籠屋

梶山喜兵衛

右は御巡検使ニ付、御借上之家々役々遂見分候内、御船附宿阿比留屋治兵衛居宅見苦敷難御用立、右被伺候通、夫々可被申付候、以上

九月十七日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

仁位格兵衛殿

平田俊左衛門殿

可被其意候

藤正左衛門殿

参判使

御巡検使御用、拙者引切承り候段相達置候処、参判使として朝鮮え被召仕、旅行中幾度八郎左衛門右御用引切被承候間被得其意、以来何事等同人え可被相伺候、以上

九月十五日

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

大目付中

仁位格兵衛殿

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

多田左柄殿

高崎翼殿

嶋居正左衛門殿

朝鮮方頭役・佐役中

船役頭役・佐役中

御勘定手代

繁野源四郎

右は御巡檢使御用掛被仰付置候処、大坂え被召仕候二付、右御用掛被差免候

同

嶋井儀左衛門

右は繁野源四郎為代、御巡檢使御用掛被仰付候

右之通被仰付候事、九月十三日

御船附宿

御船附宿六十人、平山源助以下三軒見分有之、左之役々立会見分いたし候事、尤久田浦御繫船二相成、御揚陸之節御宿御設二相成居、此節長李之允居宅御借上二相成、其外風呂屋一ヶ所、売物方一ヶ所御借上二相成、見分いたし候事但、寛政年ニは与頭も見分在之候事と相見候得共、当節ハ見分ニ不及候段御達ニ相成

御揚陸之節御宿 長 李之進

風呂屋

風呂屋

足軽 源兵衛

売物方

売物方

百姓 李兵衛

町奉行

仁位格兵衛

御勘定奉行

吉村儀右衛門

添勘定

藤正左衛門

御郡奉行

多田左柄

高崎翼

与頭手代

古川綾四郎

御船附宿

与頭書手

御船附宿見分之義は

大浦仲右衛門

御郡奉行出張ニ不及

御勘定手代

久田見分ハ町奉行

古屋新八郎

与頭手代、同書手見分ニ

内山繁左衛門

不及候事

御作事掛

古川武左衛門

御作事方江被相附置御勘定手代

笹葉孫右衛門

御作事手代

扇廣作

御惣大工

青柳善作

大工小頭 壱人

番手小頭 壱人

御巡檢使御下向ニ付、諸御手当方十二月迄全備いたし候様踏はまり可被取計候、万一御不替之儀有之候時は、御大切之次第ニ付、無油断可被相心得候、以上

上馬八疋

九月十六日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

大目付中

仁位格兵衛殿

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

多田左柄殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

嶋居正左衛門殿

朝鮮方頭役・佐役中

船役頭役・佐役中

御巡檢使御下向二付、上馬八疋御備方相達候処、唯今七疋之御立馬二付、此程御扨二相成候末  
広御買戻被成度旨被申出候得共、上馬之儀御不足之分ハ、中馬を以御償被成候段相達置候通ニ  
候、其上差支候ハ、御入用之節右末広御借上可被成候間、其趣可被相心得置候、已上

九月廿三日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

嶋居正左衛門殿

御勘定奉行所

可被得其意候

与良郷

与良郷久田村下知役

御宿 長 九郎

同村百姓 源兵衛

下宿 空兵衛

御宿 下宿

右は御巡檢使御滯船之内、久田村御揚陸有之節、御宿并下宿右之通被仰付候間、可被申渡候、  
以上

九月廿六日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

可被得其意候

御郡奉行所

多田左柄殿

高崎翼殿

御勘定奉行所

平田俊左衛門殿

可被得其意候

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

箕原九八郎殿

田舎御宿

御巡検使御下向ニ付田舎御宿ニ別帳之通被仰付候、尤役々見分之上普請積立之内、家主ヨリ当时之御時体令感服、自分より御加勢筋願出候向も有之、御吹籠之事候、其内佐護郷之儀は、普請方引請候形ニ申出、郷役人差図方別て行届奇特之次第二候、何れも申出之通被仰付候、最早御下向余月も在之間鋪候間、急速普請取掛候筈ニ付、自分普請も早々取片付候様、夫々可被相達候、以上

九月廿二日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

多田左柄殿

高崎翼殿

鶴野銀山

平田俊左衛門殿

得其意御宿々家主ヨリ御加勢筋申出候書面相渡置候通ニして、

藤正左衛門殿

御宿并下宿共ニ土台分積り前、御加勢之品ニヨリ、何歩方相減、

又自分ニて引受全取繕共、追て取調可被申出候

御巡檢使鶴野銀山御見分被成候時、唯今ニては鶴野御止宿可相成家居無之、櫻根・下原両村内  
二手当不致して難叶由被申出承届候、鶴野ニ御昼休丈之家居は有之間敷や、弥其手も不相立、  
櫻根・下原迄御出被成候てハ、御昼休場所も無之候哉、早々下村可被遂吟味候、依之御止宿ニ  
相成候節と御昼休ニ相成候節と之手当、普請方共ニ両様ニして可被申出候、御治定之場所ハ追  
て可相達候、以上

九月廿八日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

多田左柄殿

高崎翼殿

平田俊左衛門殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

日吉丸・長盛丸

御巡権使御下向ニ付、小隼日吉丸・長盛丸新規御造立御入料積り被差出、則申出之通ニして御造立被仰付候間、早々取掛候様可被致差配候、就夫旅大工八人雇、下方をも被申出、是又申出之通被仰付候、其外大坂ヨリ取下之品々ニ至り、御勘定奉行所申談、夫々可被取計候、以上

九月廿日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

箕原九八郎殿

旅大工

大目付中

旅大工入来之儀可被得其意候

御勘定奉行所

得其意、御了簡能成就ニ至候様可被相心得候、旅大工雇、下方

等之義、先規之通可被取計候

船改頭役・佐役中

旅大工入来之義、可被得其意候

作事掛

古川武左衛門

鶴野銀山

右は御巡検使御宿々御普請ニ付、普請奉行被仰付置、此節田舎御普請取掛相成候付可被差下之處、府内所々御普請取掛居、殊鶴野銀山御見分相成候節之手当等ニも差臨居、傍ニ付追て可被差下候

御勘定手代

笹葉孫右衛門

御関所

作事方手代

阿比留郡治

右は両御関所、網浦・大船越御番所其外田舎御宿御普請二付、右之面々被差下候  
右之通可被申渡候、以上

十月朔日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

平田俊左衛門殿

可被得其意候

吉村義右衛門殿

藤正左衛門殿

多田左柄殿

高崎翼殿

御勘定手代

内山繁左衛門

銀山御宿

右は御巡検使鶴野銀山御宿見分として役々被差下候処、作事方出張、御勘定手代笹葉孫右衛門  
田舎御普請として被差下、差支候付、繁右衛門儀御徒士目付兼帯被仰付、銀山御宿見分として  
被差下候、此旨可被申渡候、以上

新規御造立

十月三日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

平田俊左衛門殿

吉村義右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御巡検使御下向二付、小隼式艘新規御造立三付、旅大工八人雇、下方被仰付置候処、右之人数  
ニては年内之成就方無覚束、今式人相増雇、下方之儀又々被申出承届候、申出之通今式人相増、  
都合十人雇下被仰付候、以上

十月三日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

箕原九八郎殿

大目付中

御勘定奉行所

可被得其意候

船改頭役・佐役中

紙合羽

山駕籠

御巡檢使二付、赤青紙合羽、人馬方并諸方渡共都合五百程も御入用之内、別て人馬方渡、多数と相見申候、寛政年御巡檢使之節は御伺申上、御行列二相加候人夫、其外御見掛相拘り候分計紙合羽着用、其余御荷物二附候人足等は可成丈は茅藁之蓑にて相濟候様、被仰付候と相見申候処、当節如何可被仰付哉、寛政年之通御手当可被仰付候哉、左候得は合羽之御入用相減、斯ル御時勢御使用之御事と奉存候二付、奉伺之候、申上候通被仰付候御事御座候ハ、御郡奉行所え御達被下、右御用被召仕候郷夫、各別不見苦品用意罷上候様御達被置被下度奉存候、尤紙合羽用意方も御座候間、早々御治定之御達をも被成下度奉存候、上使用山駕籠之儀、宝曆年は御自分御駕籠にて相濟、延享年は此方御用意之駕籠二、間々被召候とも相見申候得共、多分御持越之御駕籠にて相濟候儀と相見申候付、寛政之節は別て御用意二及間敷と之儀御伺申上候処、老挺御用心二用意仕持下り候様被仰渡候処、御入用も無之哉二相見申候、此節如何可被仰付候哉、火急御用意難相届品之事故、三挺とも用意可仕候哉、御駕籠注文方段々相後候ては、御間筈之程も不安奉存候間、早々御治定御達被下度奉存候

右之趣奉伺候、御賢慮之上、何れ共御差図被成下候、以上

西十月

御勘定奉行所

〈頭注〉御付紙

紙合羽致着用候筈之もの蓑にて相濟候、口々致吟味可被申出候

〔頭注〕御付紙

先例之通、山駕籠三丁可被致用意候

水桶

寛政年、上使田舎御巡檢之節、村水山水桶之配分方、間遠ニて歩行立之銘々致迷惑候様子ニて、俄ニ水桶増候様ニと、於田舎被仰渡候付、郷々え増方相達為申趣、記録ニ相見申候、右水桶數之儀は、以前ヨリ先例を以、郷々ニて為出来候儀ニて、配方之儀是又先例之場所相極居候儀ニて御座候得共、時節柄ニ依候ては、何れも難儀仕候も可有之候付、此度より一郷ニ水桶一通ツ、相増置、所之遠近見計を以配付置候様被仰付、如何可有御座候哉、尚御吟味之上御差図被仰出被下度奉存候、此段可申上如斯御座候、以上

茶碗・柄杓

尚以申上候、本文申上候水桶之儀、弥被相増候様被仰付御事ニ御座候ハ、六郷ニて水桶六通之増ニ相成、忝通茶碗拾、柄杓四本ツ、相添候儀ニて、右両品御引定蔵ヨリ相請取差下候先規ニ御座候間、右用意方御手筋え被仰達置被下度奉存候、以上

九月廿七日

御郡奉行所

杉村右馬助様

御付紙

申出之通一郷水桶巻通ツ、都合六通相増候様可被取計、以上

十月八日

幾度八郎左衛門

杉村右馬助

多田左柄殿

高崎翼殿

平田俊左衛門殿

得其意、柄杓・茶碗等相増可被取計候

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

御郡奉行

高崎翼

右は、御巡検使御用掛多田左柄儀旅行二付、御用掛二被差加候

乾一郎兵衛

幾度又右衛門

右は御巡検使御下向二付、御用達被仰付候

十月十二日

田しま所左衛門

御勘定奉行所

御宿御借上

口上手控

御手当

私住居之儀、御巡檢使御宿被仰付御借上被成と之御事被仰達、最早近々御普請御取掛ニも相成可申、随ては小人多人数入込、住居俣ニては致迷惑候間、早々引移候様仕度奉存候、右ニ付移先之儀は、従上御用意被下候御事ニ御座候哉、又は自分致用意候儀ニ御座候哉、兩段之間疑惑候付奉伺候、何れ之道急速御差図可被下候、尤自分ニて致用意候儀ニ候得は兼々内困之身分、少之事ながら難相届、如何ニも残心之仕合ニ御座候、依之御時体も被為違候中、御苦柄筋之儀難申上奉存候得共、内情御憐察被下、相当御手当被下置候は、御蔭を以不閤引払候様仕、御用筋無滞相勤旁以難有仕合可奉存候、此段何分可然被仰上被下候様偏ニ奉頼候、以上

平田主計

十月六日

平田主計

御与頭中様

〔頭注〕御付紙

銀五百匁余  
見届候、引移先は従上御手当可被下候処、御窮迫之御時体、難御手届候間、此節銀五百弍拾五匁御渡被下候末、於自分相応之家居借請候様可致候、尤御用済本宅引移雜費等も、右之内を以相償候様可被申渡候、以上

十月十七日

幾度八郎右衛門

田しま左近右衛門

浜崎

田嶋所左衛門殿  
平田俊左衛門殿  
藤正左衛門殿

御巡檢ニ付浜崎ニおいて御用意方御品之内、台子三通差越方申越候処、紙末之通不足ニ付、市中ヨリ御借上被成候間被及吟味、持合候者え被相達、御勘定奉行所え差出候様可被取計候、以上

十月十七日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

仁位格兵衛殿

御勘定奉行所

可被其意候

茶合

一、茶合 三

風呂

一、風呂 壱通

以上

田嶋所左衛門

朝鮮渡

右御巡檢御下向ニ付御用承り、杉村右馬助朝鮮渡後幾度八郎左衛門一人ニて重太之御用筋切、太切被相心得相司（マ）之儀被願出候、品ニヨリ左近右衛門儀、八郎左衛門同様右御用筋被承之候間、可被得其意候、以上

十月十七日

年寄中

田嶋所左衛門殿

大目付中

仁位格兵衛殿

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

島居正左衛門殿

朝鮮方頭役・添役中

船改頭役・佐役中

渡邊庄左衛門

右は御巡檢使御下向ニ付、人馬下知役被仰付候、以上

人馬下知役

十月十九日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

南岳院

同、南岳院より願出候は、此節御巡檢使ニ付居宅御借上被仰付候付、移先御差図被下候様との書面

御付紙

見届候、変宅先之儀御用意可被下筈ながら、御逼迫之此場、難被及手届候間、銀四百五拾目御渡被下候、於自分致借宅、引移候様可相心得候、尤稻荷社上下遷宮を初御用済之上本宅引移之雜費等ニ至り、右之手当を以テ可相償候、此旨可被申渡候、以上

十月十九日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

田嶋所左衛門殿

平田俊左衛門殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

仮案書役 佐藤恒右衛門

御祐筆 嶋居城之助

同帳付 江口嘉右衛門

御用掛

火消番

右は御巡検使御用掛被仰付候、以上

十月十四日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

御使者番

高瀬外記

加納作左衛門

幾度六左衛門

杉村入佐之輔

陶山五左衛門

七五三廣右衛門

内山次郎左衛門

小田郡兵衛

吉村清右衛門

小茂田貫介

末松吉左衛門

柚谷次右衛門

西尾勘左衛門

亀川安兵衛

火消番一組

---

火消番一組

俵郡左衛門

小田哲之助

築城糺

大竹新三郎

相良太次兵衛

熊生弥五六

松山卯右衛門

佐使平作

小茂田重左衛門

山田作左衛門

浅野又作

吉川内記

樋口新右衛門

平田繁兵衛

樋口織太

火消番一組

鳴居織衛

波戸御番所

波戸御番所詰

打廻頭添役

中川四郎五郎

庄司佐太郎

古川宇平治

宮川茂

加勢二橋

森川次郎左衛門

井上奎左衛門

加納文次右衛門

畑嶋伊左衛門

末永善右衛門

山崎東助

阿比留唯之助

遠藤恒七

小田三十郎

立花近介

田舎往還

道川役

御関所加番

濱崎治兵衛  
小茂田一己

田舎往還之節

中江類右衛門  
雨森寛兵衛  
吉副藤右衛門

御屋敷下夕堅

堀澤太

大森治左衛門  
津江友右衛門

道川役加役

玉山和吉郎  
糸瀬伊左衛門

御着船口上船之節

八木恒右衛門

御先払

玉澤新助  
岩崎権之助

御茶屋

七曲道

人馬手代

繩船奉行

同所御茶屋拵下知役 大浦儀右衛門

七曲道普請 山本志津馬

下知役 棧原伴九郎

御用承

医師 平山元竹  
外科 壺人

人馬手代

中村九七  
白水最左衛門  
白井柳七  
小田喜一  
井常右衛門  
山崎正助

繩船奉行

高山卿  
青木藤右衛門

夜具

久田村

上使御家中衆願二付、  
田舎之夜具被差下節之  
支配人 三原八助

於田舎旅籠	永留宇左衛門
被相望候節	梅野瀧之助
賄下知役	俵幾左衛門
	井上茂七郎
	小田安右衛門
	梅野右七

久田村仮番所詰	国分加右衛門
	武田統
	吉田兵右衛門
	勝田湧之助
	三木田経右衛門
	田原清十郎

御宿番人

上使ヨリ大坂町奉行え  
御届御状被遣候節之御  
使

小川茂左衛門  
田中又右衛門

嶋村判九郎

上使一番  
平山幾治

御宿番人  
小川太二郎  
佐治與八郎

同二番  
幾度万右衛門  
御宿番人  
吉副政之介  
井上太之介

同三番  
棧原直右衛門  
清原忠右衛門

御宿番人「殿村城之介

一番

梅野次平治

古藤杢右衛門

二番

御帰帆之節

高嶋廣右衛門

漕船下知

勝本迄漕船

鈴木元右衛門

下知

三番

石田信左衛門

佐伯勝五郎

右は御巡検使御下向ニ付、右之通被仰付候、以上

十月十九日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

鶴野銀山

御巡検使、此節鶴野銀山御見分被成候時、御泊場所并御通り筋之儀追々被申出承届候、鶏知村御泊ニて鶴野え御立越御見分相濟、直ニ御上府と申候ては、難行届儀も可在之候間、先規之通鶏知村御休、其日鶴野迄御立越、檉根・下原両村ニ掛御泊被成候様、紙末之通御宿被仰付候、

榎根村

且又御通筋も此節は十文字峠ヨリ日見山通り鶴野え御通行、御上府之節も日見山通、十文字峠え御立帰、七曲りより御上府被成候様御治定被成候、尤御見分と申義も駈と不相極事故、只今より道造り、家普請等取掛候ニは不及候、弥御見分被成候段、江戸表ヨリ申来候上は、急速取計候様、兼て心組可被置候、以上

十月廿二日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

高崎翼殿

吉村義右衛門殿

得其意、御普請積帳御郡奉行所え相渡、御間筋取計方可被申談候

藤正左衛門殿

榎根村給人

一番御宿

一宮藤馬

下宿

法者「源右衛門

百姓「惣右衛門

二番御宿

同村 法清寺

下宿

足輕「松右衛門

百姓「金六

下原村

下原村給人

三番御宿

鈴木志津馬

下宿

足輕 源右衛門

百姓 松右衛門

以上

与頭

樋口亘理

若殿様

右は御巡検使御宿え、若殿様御出不被遊節之御使者被仰付候、以上

十月廿三日

御勘定奉行所田しま所左衛門

御用薪

御巡検使府内御宿用之薪、先規五拾疋被相備候と相見候処、段々と郷々御宿普請御取掛相成候  
二付ては木材取出方を初、人夫之被召仕多相成候付、常年之通薪漕登得申間敷、御当用之分も  
差支可申哉と奉存候、就夫寛政年ニも真下タ・西平両所御立山内より、右御用薪伐出し御免被  
仰付、近村之ものへ賃銀相与へ為伐出候と相見申候、此先段々繁務之時節ニ差臨ミ候時は、  
果敢々々(はかばかし)敷漕登得申間敷候付、此度逆も寛政年之通り、右両所御立山内より五拾疋丈伐出し御

薪五拾疋

免被仰付被下度奉存候、右申上候通被仰付候御事御座候は、早々被仰出可被下候、此段為可申上如斯御座候、以上

十月十二日

御郡奉行所

幾度八郎左衛門様

御付紙

承届候、郷々人夫被召仕多常年之通薪漕登不得と相聞候付、寛政年之通り、真下夕・西平両所御立山内より御宿入用之薪五拾疋伐取り候儀御免被成、賃銀例之通相与候は勿論、一切檜木不伐取、御山不荒様御山え入候者え堅く被申付、尤御山預役え右之趣申渡置候条、差図を請候様可被申付候、伐出方之儀、先規之手数可被取計候、以上

十月廿五日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

高崎翼殿

平田俊左衛門殿

藤正左衛門殿

中馬六疋

御巡檢使ニ付、中馬六疋御備之儀御達被仰出候処、中馬之儀、寛政年ニは仮厩、且飼料之諸品御用意被置候ては御出方不一形候付、馬主預之儀御申上、馬主えハ賃銀を以御渡被下候様伺出候処、御出方ニも不相成事故、伺之通被仰付候ものと相見、此節は如何可被仰付候哉

一、寛政年以前、上使目録追々吟味仕見候処、上馬は拾疋余、中馬は弍拾疋余多分御立被置候御先形ニ相見、既宝曆年ニは田舎御附廻拾疋候処、其節之御巡檢使御家中馬を不相望候付、大山村より牽戻候者と相見、寛政年は兼て御用意被置候御馬被及断候付、不残被差返候と相見、此節自然御備之外御馬多数被相望候節ハ、御馬具ヨリして、全御備無之御用欠ニ相成候間、為念此段奉添御聞置候、以上

九月廿八日

御馬方

馬主預

〈頭注〉御付紙

承届候、当節も寛政年之通、馬主預ニ被仰付候間、御勘定奉行所遂役談、夫々可被取計候

〈頭注〉御付紙

御巡檢使、御家中内馬を被相望候とも、御国之儀は余国と違、山城嶮岨ニ在之、馬上之通行難相成趣相断、駕籠ニて相濟候筈候得とも、為用心中馬六匹御用意之筈ニ候右兩条、付札之通り可被相心得候、以上

中馬六疋

十月廿三日

幾度八郎左衛門

田舎御宿

田嶋左近右衛門

嶋居正左衛門殿  
吉村儀右衛門殿  
藤正左衛門殿

作事掛

普請奉行

古川武左衛門

右は御巡検使ニ付、先達て田舎御宿々御普請役被差下候処、府内所々御普請中ニ付、武左衛門儀は追て可被差下旨相達置候、然処今一組普請役被差下候付、府内御普請皆成就ニは不至候得共、此節被差下候間、田舎御普請向大概手配等見分之上可令上府候

作事手代

扇廣作

右は田舎御宿々御普請役として、此節被差下候

右之通り可被申渡候、以上

十月廿八日

幾度八郎左衛門  
田嶋左近右衛門

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

可被得其意候

早田安賀之介

人馬下知役

右は今般御巡檢使御下向二付、人馬下知役被仰付候

渡邊庄左衛門

右同断二付、人馬下知役被仰付置候処、病氣依願被差免候

作事方出張

表御目付

谷織之輔

田舎御宿

右は御巡檢使二付、田舎御宿々御普請として役々今一組被差下候付、御普請方え被相附候、  
以上

十月廿九日

田嶋所左衛門

御勘定奉行所

御宿札

作事方出張

表御目付

谷織之輔

右は御巡検使ニ付、田舎御宿々御普請として、役々今一組被差下候付、御普請方え被相附被差下候、此旨可被申渡候、以上

十月廿八日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

田嶋所左衛門殿

大目付中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御府内・田舎共

御宿札

椽板

長 貳尺壹寸

横 五寸五歩

厚 五歩

但、御宿一軒ニ付壹枚ツ、

下宿札

右同断

下宿札

松板

長 壹尺八寸

横 五寸五歩

厚 四歩半

但、一軒ニ付壹枚ツ、

仁位・佐須奈

御召船

御召船々札 六枚

檣板

長 貳尺三寸

横 五寸五歩

厚 五歩

右之通、御休泊数ニ応し出来可被申付候、以上

十一月二日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

客館御見分

御巡檢使御下向之上、客館御見分可有之も難計事故、其節不都合之儀無之様、夫々可被取調置候、以上

十一月九日

幾度八郎左衛門

御勘定奉行所

田しま左近右衛門

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

表御目付

谷織之輔

右は田舎下被仰付置候処、病氣依願被差免候、尤持役は不被差免候、以上

十一月九日

御勘定奉行所多田采男

御勘定手代

扇四郎治

右は御巡検使田舎御宿之御普請として、役々今一組被差下候処、作事方出張見分役病氣差支候付、四郎治儀御徒士目付兼帯、右御普請方え被相附被差下候、此旨可被申渡候、以上

十一月十四日

幾度八郎左衛門

田嶋左近左衛門

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

同、御勘定手代扇四郎治、田舎御普請方え被差下方之儀、与頭多田采男よりも申来

御待請御用 御用達

沓州迄御送御使者 幾度又右衛門

沓州迄御迎

御使者田舎御附廻 乾一郎兵衛

右之通被仰付候、以上

十一月十一日

御勘定奉行所多田采男

川邊一角

博多迄

右は御巡検使御下向二付、御下向時節相知候上、博多迄被召仕候段、酉十一月十四日樋口彈正より申来ル、御巡検使御通筋道造二付、此節御郡奉行所高崎翼え相附、御駕籠之者被差下候間、

節道具

廻村中一日銀式匁ツ、先規之通旅籠銀被下、御合力銀一ヶ月銀四匁御渡被下候、此旨可被申付候、以上

十一月廿四日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

御用人中

御勘定奉行所

可被得其意候

御郡奉行所

御巡檢使御下向ニ付、諸番所且小隼節道具之儀、別帳之通、夫々可被致手当候、以上

十一月廿七日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

田嶋所左衛門殿

深見官左衛門殿

唐坊太膳殿

三浦沢之助殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

箕原九八郎殿

打廻頭兼

仁位格兵衛殿

船改頭役・佐役中

別帳写

飾道具

諸番所勤方并飾道具之事

打廻御番所

同、頭役、木綿羽織袴着、昼忒人ツ、相勤、但、鍵為持候事

同、手代役、木綿羽織袴着、昼夜共五人ツ、相勤

同、中間三人、柿色蛇目御紋対之羽織着、昼夜相勤

御巡檢使御通之節

同、頭役忒人、麻上下着、辻燈籠之脇二下座、但、頭役之儀町奉行より兼役被仰付置、差支候付、当節は添役忒人被仰付候事

同、手代役拾人、羽織袴着、鍵建之前二一列二下座

同、中間八人、柿色蛇目御紋対之羽織着、御番所手堀東二堪忍仕

船改番所

飾道具

同、大身鍮拾本

同、突棒

同、指股

同、頭役持道具

同、手桶六つ 辻燈籠之前

同、幕

同、鉄砲拾丁 皮袋

同、張弓拾張

同、屏風二て囲

船改番所

同、頭役弍人、御着船御乗船之節、布上下着、下座仕、平日裏附上下着、二人共相勤、但、平日共鐘為持候事

同、手代役羽織袴着、下座仕、平日共不殘相勤、夜番弍人ツ、相勤

同、足輕下代之者、結柴小紋蛇目御紋対羽織着、手代役之後二下座仕、平日共不殘相勤、夜は代々弍人ツ、相勤

飾道具

同、鉄砲拾丁

同、対鐘拾本

同、頭役持道具式本

同、突棒

同、捻

同、手桶拾

同、幕

波戸御番所

波戸御番所

同、御馬廻式人、大小姓六人、御船揚・御上船・田舎往還之節、麻上下着下座仕、組之者四人  
蛇目御紋対羽織着、堪忍

同、平日は御馬廻之人裏付上下着、昼計相勤、尤大小姓式人、服同断、組之者右之支度にて昼  
夜代々相勤

同、御馬廻は上下五人、挾箱は勝手次第之事

飾道具

飾道具

同、大身鍮五本

同、鉄砲五丁

同、張弓五丁

同、突棒

同、差股

同、捻

同、幕

同、屏風にて囲之

御宿前

御宿前仮番所左之通

同、使者家之下壺軒 奥里之出口南向

同、南岳院之下壺軒

同、平田主計前壺軒 いつれも三畳敷切組

同、木綿幕引両付

右足輕式人、対羽織着、昼夜相勤

久田村切組番所、八畳敷

延命寺之下、橋ヨリ西之方、浜辺北向ニ建、侍詰所は疊敷也、組之者詰所は式疊通、薄縁敷之

同、御徒士八人、久田村え罷越居、羽織袴着、昼夜式人ツ、相勤候事  
同、組之者六人罷越居、結柴小紋対羽織着、昼夜四人ツ、相勤

飾道具

飾道具

同、対鑓式本

同、突棒

同、差股

同、捻

同、幕

右御巡檢使御着船之日より、御乗船久田浦え廻り候節より御上船以後、御在船中相勤

久田道打上坂仮番所、式間格掘立、但御船奉行より不見処へ建之

右御巡檢使御乗船、久田浦御在船之中、女童ニ至御船見物ニ罷越候者在之節、差留、往還之者無滞罷通、不行規ニ無之様、組之者式人ツ、度々近辺立廻候様申付、尤久田薬師參詣も御滞船中差留

御米藏前仮番所、但御米藏御門、北手ヨリ松山卯右衛門南手迄、双方ヨリ駒寄いたし置

長盛丸

御船飾  
日吉丸

同、足輕式人ツ、相詰

黒門之内、小屋掛番所、壱軒角

同、御巡検使并御馳走方之侍、末々迄御城近辺不罷通、門と番手壱人、水夫壱人つ、昼夜相詰

但、黒門・御米蔵門・宴席門扉を鎖置、用事之時計番人開候付、番手壱人・水主壱人相詰

御船飾左之通

日吉丸

鉄砲式丁、猩々皮袋入

木綿火縄式形

張弓式張

鞆式甫

猩々皮鞆壱本

長盛丸

鉄砲式丁、皮袋

木綿火縄式形

張弓式張

鞞式甫

十文字鐘壺本

小隼壺艘 府内浦御用達乗船

鉄砲式丁

木綿火繩式形

鞞式甫

張弓式張

鳥毛鐘壺本

小隼代村船 佐須奈浦用

鉄砲式丁、皮袋入

木綿火繩式形

張弓式張

鞞式甫

以上

佐須奈

佐須奈御関所御番所飾

同、木綿引両付幕張之、但式張差下候事

同、鞆弓拾張、弓台式ツ用意之事

同、皮袋鉄砲拾丁、鉄砲台式ツ用意之事

竹火繩添

同、玉簞筒壹荷

同、胴乱拾ウ

同、玉入拾ウ

同、口薬入拾ウ

同、鳥毛鍮五本

同、突棒

同、差股

同、捻

陰番所飾

陰番所飾

同、木綿引両幕引之、但壹帳差下候事

同、突棒

御館御門飾

同、差股  
同、捻

御館御門飾

同、飾手桶六つ

同、張手甫十五

同、鶯口六本

道具建出来之事

同、手桶拾ウ

同、大水箆壹つ

以上

雁木

十二月

一、御巡檢使ニ付、波戸御揚雁木内外ニ壹ツつ、在之候ては、御乗揚之節込合候付、寛政年外  
目ニ今壹つ増雁木出来候と相見候、此節も寛政年之通都合三ツ出来候様可被取計候  
右御口達書、左近右衛門殿より藤正左衛門え御渡被成

小田村四郎治

田舎御宿

右は賄頭にて、御巡検使御用掛被仰付置候処、当年迄にて交代ニ相成候付、右御用掛被差免候

当酉年賄掛

大宮吉左衛門

右は御巡検使御用掛被仰付置候処、永遠勤終候故、御用掛被差免候

賄頭

高雄治五左衛門

来戌年賄掛

井常右衛門

右は御巡検使御用掛被仰付候、以上

十二月七日

御勘定奉行所樋口弾正

御勘定手代仮役

作事方出張

山内宇右衛門

作事方手代助勤

岡嶋貞治

右は御巡検使ニ付、先達田舎御宿々御普請役々被差下置候処、未夕鶏知村御宿々迄は取掛ニ不

久田浦

至と相聞候付、同村御普請として被差下候、以上

十二月十日

御勘定奉行所樋口弾正

御巡檢使久田浦御滯船中、御揚陸有之候節之為、彼村給人長杵之進居宅御借上、其外風呂場・小間物屋等にて式軒、都合參軒御借上ニ相成候ニ付、其筋より之御普請積前を以自力相届候丈御加勢申上候様相達申候処、右同人ヨリ紙末之通御加勢申出候付、其御筋へ被仰達被下度、尤右之外、貧村之儀相届得不申段、彼郷奉役ヨリ申出候間、可然様御聞届被下候様ニと奉存候、此段為可申上如此御座候、以上

二月十二日

御郡奉行所

田嶋左近右衛門様

幾度八郎左衛門様

一、銀百匁

但御入料銀之内如此

一、平瓦四拾三枚

一、丸同式拾五枚

但積前之分

一、棧同三拾八枚

一、包同五枚

以上

御国繩船

御付紙

申出之趣承届候、空之進儀は当時之御時体令感服、普請積前之内、御加勢申出御吹籠之事、御旨空之進えも可被相達置候、以上

十二月九日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

高崎翼殿

御郡奉行所

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

乍恐口上覚

御巡檢使二付、田舎御付廻り御国繩船耆艘相仕出候様御達之御旨奉畏罷在候、然処以前とは違、諸品高直ニ相成莫大之物入ニ御座候得共、差掛候御用之事故、何分ニも相仕出し御間筈宜敷仕度奉存候、就夫御時体柄奉恐入候次第二御座候得共、九錢五百匁丈御合力被仰付被成下候様奉願上候、尤先達御勘定奉行所え積書取出置候通之入料ニ御座候得共、右五百匁を土台ニ仕、斯御重要之御儀故、其余之処は魚問屋中より繕立急度御用欠ニ不相成候様、村々付廻可申候付、願之通五百匁丈御合力被仰付被成下候は、年内より其用意仕、間筈宜敷出精仕可申候間、右之

魚問屋

事情何分宜御聞通被成下候様、偏奉願上候

右之趣、御序之刻御町奉行様へ宜被仰上被下候様奉頼候、以上

十二月二日

魚問屋統領

松本屋久右衛門

長濱屋常七

馬場屋喜右衛門

郡屋佐兵衛

黒岩儀右衛門

前川松兵衛殿

遠藤忠蔵殿

〔頭注〕御付紙

見届候、事情は無余儀相聞候得共、御時体柄不勝手候付、銀五百匁貸渡候間、繩船壹艘曳下、御用支二不相成様可被取計候、此旨可被申付候、以上

十二月廿三日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

銀五百匁  
繩船

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

田舎御宿

御巡検使田舎御宿々為御普請、笹原孫右衛門・阿比留郡治并大工拾參人、番手等被差下、豊崎

御普請

郷より取掛、今程仁位村御普請取掛罷在候処、頃日此雨天相続仕事都合悪敷、年内ニ成就至兼

佐護村

候間、来廿五日迄ニ此節ハ一先相仕舞、上府被仰付度段、孫右衛門より申越、仁位村御成就ニ

飯米

相成候時、佐護村にて佐護四郎左衛門宅、仁田村小宮博・宮原万之允、琴村にて財部貞次郎宅

等、自分より普請被仰付置候分は、何れも年内成就不仕儀と相聞申候上、仁位村之一手越年仕

候時は、歳暮ヨリ年始ニ迄至り、三四日位は休ミ不被仰付候てハ、不相叶儀と相聞、其間は多

人数之大工、其外至飯米之御出捨不輕儀ニ付、申越之通廿五日切相仕廻上府仕、来正月五ケ日

過ヨリ被差下、御普請残之分相済候様被仰付候て如何可在御座哉、其通被仰付候御儀ニ御座候

は、上府方之儀申越候様可仕候、此段奉伺之候、以上

西十二月

御勘定奉行所

〔頭注〕御付紙

諸方御普請、年内一盃成就至候様役々出精方兼て相達置候、然処雨天打続存外果散取兼、最早

深山村給人

余日も無之、一卜先上府方之儀被伺出、無是非誤合ニ相見候付、申出之通来廿五日迄ニ相仕廻令上府、来早春取掛方無間後候様可被相心得候、以上

十二月廿三日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

可被得其意候

佐護郷深山村

足輕

勘兵衛

右は深山村給人、春日亀万右衛門居宅、御巡檢使下宿ニ御借上被仰付置候処、老母大病相煩、普請難手届御断願出候処、右勘兵衛宅之恰好万右衛門居宅同様ニ有之、自分御加勢筋をも万右衛門同様可仕旨申出候と相聞候付、則下宿ニ御借上被成候間、普請方役々ヨリ万右衛門え相渡置候釘類、勘兵衛ニ相渡候ハ素り、普請向之義も役々ヨリ申談置候通、勘兵衛ニ申談、普請方御間答能出来候様、夫々可被相達候、以上

正月四日

幾度八郎左衛門

田嶋左近右衛門

仁位村御普請

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

可被得其意候

御勘定手代

御徒士目付兼勤

作事方出張

扇四郎治

御作事手代

扇廣作

右は御巡検使、仁位村御宿御普請手残之品有之、其外御泊村々御宿傍ら湯殿出来無之分、新規建組として被差下候、此旨可被申渡候、以上

正月十二日

幾度八郎左衛門  
田嶋左近右衛門

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

可被得其意候

高崎翼殿

御郡奉行所

加納作左衛門

右は巡檢上使、御使者勤被仰付置候処、病氣依願被差免候、以上

十二月廿三日

御勘定奉行所樋口彈正

諸御手当方

御巡檢使御下向二付、諸御手当方十二月迄二致全備候様、九月十六日委曲相達置候通二候、御用意相揃候ハ、早々可被申出候、以上

正月廿五日

幾度八郎左衛門

田嶋所左衛門殿

田嶋左近右衛門

大目付中

町奉行中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

参判使

箕原九八郎殿

嶋居正左衛門殿

朝鮮方頭役・添役中

船改頭役・添役中

御巡検使御用之儀、杉村右馬助旅行中、幾度八郎左衛門引切被承候段相達置候、然処八郎左衛門儀嗣位参判使として朝鮮え被差渡候付、此節願依右御用被承候儀被差免候条、可被得其意候、以上

二月十五日

田嶋左近右衛門

田嶋所左衛門殿

大目付中

町奉行中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

嶋居正左衛門殿

江戸表御発駕

朝鮮方頭役・佐役中

船改頭役・佐役中

御巡検使之儀、来四月初旬、江戸表御発駕之御積二候段申来候間、諸用意方猶又無油可被相心得候、以上

二月十八日

田嶋左近右衛門

田嶋所左衛門殿

大目付中

町奉行中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

嶋居正左衛門殿

御用達中

船改頭役・佐役中

早田安賀之介殿

鶴野銀山  
平瀬銅山

鷄知村

鶴野銀山・平瀬銅山跡御見分之有無、此節御下向之御巡檢使え於江戸表相伺候處、御見分不被成との御事候間、可被得其意候、以上

二月廿八日

田嶋左近右衛門

田嶋所左衛門殿

町奉行中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御用達中

早田安賀之介殿

御巡檢使御下向ニ付、一体之取計方寛政年之形ニ被準、諸伺等之儀も右之振を以可被伺出旨、先般相達置候處、当節御差凶事万端寛政年之通ニ候段、江戸表ヨリ申来候付、諸御手当弥右之形ニ可被相心得候

一、鷄知村・佐須奈村御昼休、一汁一菜之御昼飯可被致用意候  
右之通得其意、関之筋々え可被相達候、以上

三月八日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

大目付中

町奉行中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

嶋居正左衛門殿

朝鮮方頭役・佐役中

御用達中

船改頭役・佐役中

早田安賀之介殿

御通筋見分

以手紙令啓上候、明十八日御巡檢使御通筋為見分罷越候間、被得其意、四時御屋敷へ可被相揃候、尤御勘定手代・作事掛えは通達可被致候、此段為可申達如此候、以上

三月十七日

田嶋所左衛門

吉村儀右衛門殿

御迎之御用

若殿様

藤正左衛門殿

町人

書手壱人

右は御巡検使ニ付御用達え被相附候、尤御迎之御用達え被相附、勝本えも差越候間、相応之人吟味之上可被申付候、以上

三月十七日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

町奉行中

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

下田廣人

右は先般御巡検使、若殿様ヨリ之御使者被仰付置候処、病氣依願被差免候、以上

三月十九日

田嶋所左衛門

御勘定奉行所

御巡檢使御入船之節、御船々より見掛之場所垣石垣、其外繕所等、銘々ヨリ見苦しく無之様、  
仮成ニ取繕候様、夫々可申渡候、以上

三月十七日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

道川役立廻候て差図候様可被申渡候

町奉行中

町家へ

吉村儀右衛門殿

上ヨリ之繕之分夫々可被致差図候

藤正左衛門殿

御菓子重  
水茶屋

御巡檢使、仁位御船中にて御菓子重被進、水茶屋え煮売差出方等之有無を以、宝曆・寛政兩例  
之間被伺出候節、江戸表之御様子ニ応し可及差図旨相達置候、然処被仰出事等、万端寛政之通  
ニ相見候付、弥寛政之通被取設方相達置候得共、仁位御渡御菓子重用意は素り、酒肴、煮売等  
差出ニ不及候、餅、飴類之菓子売物、寛政年は員数少く、此方人夫等えは初発不完渡、不都合  
之様子ニ及相聞由ニ候得は、見計を以、不足之儀無之様可被相心得候、以上

三月廿一日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

金石御城郭

金石御城郭、東西南北何程有之哉之御尋有之居、於御国御答可申上旨申上置候付、右東西南北之間数、繩張取計可被申出候

右、右馬助殿ヨリ御達有之

御船頭

御船頭

小田伝兵衛

右は御巡検使御着之節、当浦御繫船方下知人被仰付候段、与頭田嶋所左衛門ヨリ申来

御船頭

吉田又市

梅野武左衛門

御迎送

右は老州勝本迄、御巡検使御迎送廻り、仁位御泊之節御乗船えも被相附、小隼下知兼帯被仰付候

山口文左衛門

右は仁位御渡之節、御乗船え被相附、小隼下知兼帯被仰付候

三月十四日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

府内売物方  
久田売物方

御徒士目付

府内売物方  
久田売物方  
永田久右衛門

同仮役

倉掛与助

田舎御往還之節  
三井田好右衛門

御三方様御先え  
黒岩十左衛門

相立候行規人

同断御出立前浜ヨリ  
信田大作

棧原迄御通筋行規人  
今耆人

右之通、御巡検使御下向二付、御役宛被仰付候事

幾度六左衛門

右は御巡検使御使者勤被仰付候処、病氣依願被差免候

小川武左衛門

右同断、御下向二付久田村仮番所詰被仰付置候処、病氣依願被差免候

三月廿五日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

御朱印人馬

山駕籠

旅宿夜具

野菜・魚

覚

一、御領分巡見通行之節、先触之外余計之人馬堅御差出有之間敷候、尤山坂難所之場所、或は弱き馬壹駄分壹疋ニ難附事も有之、御朱印人馬先触之人馬にて、若不足之分は雇可申付候、万一俄病人等有之節は、賃人足、山駕籠等於其所々雇可申付候間、前広御手当として余計之人馬御用意之儀は、決して無用之事ニ付、是等之儀兼て宿役人え篤と御申付可有之候

一、通行之節、安否為御尋御使者并御馳走として、御役人等被差出候儀堅及御断申候

一、旅宿夜具之類有合之品にて、如何様古候共不苦候、并泊休宿賄之儀先達て申達置候通、木錢にて一汁一菜ニ申付候之上は、右之外堅ク差出間敷候、若又兼て心掛置候儀は甚夕無益之事候間、曾て其儀無之様御申付、且膳、椀等之儀在合之品にて目立不申候様、急度御申付可有之候

但、野菜、魚類等は勿論、其外共在合無之品、外より取寄候儀は決して無用之事候、自然物每不自由成品ハ、一汁一菜ニは不限、香之物計にて不苦候

右之趣、猶又申達候間、其所々宿役人并旅宿のものへ嚴敷御申付可有之候、且ツ何品ニよらず、新規仕立候儀は無用之事ニ候、諸事古例ニ不拘万端無益之事共無之様心得候儀、能々吞込候様精々御申達可被置候、若前条之趣心得違於有之は、帰府之上可申立候、左候ては、如此各方へ相談候証も無之事候間、此外共右ニ準万端手輕專一二いたし、其所々之痛ニ不成様御取計可有之候

正月廿八日

近藤勘七郎様

右、御巡検使近藤勘七郎様より御書付を以、御殿達之旨万端寛政年之御振二候間、各関之筋々  
えも夫々可申渡置候、以上

三月廿五日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

町奉行中

町屋ヨリ掛之者えも被仰出、拜見為仕可被置候

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御通筋村々役人中え右同断

箕原九八郎殿

厚田宇左衛門

大宮吉左衛門

波多野新左衛門

田口甚七郎

田舎御附廻り

右は御巡検使御下向賄掛え被差加、田舎御附廻り被仰付候、以上

三月廿五日

御勘定奉行所田嶋左近右衛門

若殿様

番柳左衛門

右は原四郎左衛門為代、巡檢上使、若殿様之御使者被仰付候

小島宇内

右は下田廣人為代、右同断御使者被仰付候

新田平作

右は巡檢使ニ付、波戸御番所詰宮川茂為代被仰付候

森甚兵衛

梅野廣右衛門

信田武右衛門

人馬方

右同断、人馬方手代白井柳七・井常右衛門・山崎正助為代被仰付候

佐々木大右衛門

扇五兵衛

棧原惣右衛門

右同断、於田舎旅籠賄下知梅野滝之助・井上茂七郎・小田安右衛門為代被仰付候

春田久米輔

右同断、御家中頼ニ付田舎え夜具被差下候節、支配人三原八助為代被仰付候

夜具

荒川怒吉

久田村

右同断、大坂御町奉行之御届被遣候節之御使、島村判九郎為代被仰付候

河村茂左衛門

田崎富右衛門

竹末相助

右同断、久田村仮番所詰勝田湧之助・三木田経右衛門・田原清十郎為代被仰付候

内野門兵衛

神宮豊之輔

河村郡右衛門

橘小熊

田中万兵衛

御宿番人

右同断、御三方様御宿番人平山幾治・佐治与八郎・幾度万右衛門・井上太之助・棧原惣右衛門  
為代被仰付候

橘茂左衛門

漕船下知

右同断、御帰帆之節勝本迄漕船下知、高崎廣右衛門為代被仰付候

鈴木政右衛門

大浦五郎左衛門

久井右兵衛

着服

絹服

佐々木重右衛門

右同断、火消番吉川内記・小田三十郎・遠藤恒七・山崎東介為代被仰付候

三月二十四日

御勘定奉行所田嶋左近右衛門

御国内衣服之制法被仰出置候处、御巡檢使之儀、公儀被对候儀ニ付、寛政年之振ニ被準、懸之面々着服左之通被仰付候

年寄中

表向出張之諸役

御用達

人馬下知役

御使者

府内御船揚御上船之節

先弘大小姓

医師

外科

右は不目立、絹服、麻上下着

諸番所詰

綿服

御目通

御関所役々共

堅之面々

右は綿服着用、内役人は右ニ可準候

年行司

町役

右は御巡検使、御目通ニ罷出候節も綿服着用

右之通、得其意、夫々可被申渡候、以上

三月廿三日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

大目付中

町奉行中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

加城六之進

右は幾度六左衛門為代、御巡検使御宿え之御使者被仰付候

吉野源兵衛

右は小川茂左衛門為代、御巡検使二付、久田村仮番所詰被仰付候

三月廿三日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

平山元舛

附医

右は御巡検使附医被仰付置候処、病氣依願被差免候段、組頭田嶋所左衛門より三月廿五日、日附を以申来候事

御船手

御巡検使二付、御船手四十五人不足之内、十八人は船大工を以被相償、残式十七人御雇之義被伺出承届候、伺之人数相応之者吟味、御雇可被申付候、以上

四月朔日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

箕原九八郎殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

夜廻役

御巡檢使御下向ニ被差臨候付、別段夜廻役被相設、休息所之儀、宮谷橋御番所ニ被仰付候条、可被得其意候、以上

四月朔日

御勘定奉行所樋口彈正

番柳左衛門

右は御巡檢使御使者勤被仰付置候処、病氣依願被差免候

四月四日

御勘定奉行所樋口彈正

曾我又左衛門様 三浦沢之助

大久保勘三郎様 杉村入佐之輔

近藤勘七郎様 番柳左衛門

出火之節

右之通出火之節、御巡檢使御立退場ニ居宅御借上被成候間、兼て相心得居候様可申渡候、以上

四月四日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

御駕籠昇

御巡検使御駕籠昇用之夫三十人、御着之日より人馬掛方へ可被相渡候、府内ヨリ之十五人は銘々居所ニ罷在、郡ヨリ之十五人は草使屋へ召置、御巡検使御着之日相図之具吹候は、早速人馬掛方へ相揃候様可仕候、若揃方遅々候ては、御用之差支ニ相成候間、兼て心掛罷有候様、能々可被申付置候、以上

四月七日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

吉村儀右衛門殿

駕籠夫十五人之者へ可被申付置候

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御郡ヨリ之夫之者へ兼て可被申付置候

早田安賀之介殿

可被得其意候

仁位村給人

仁位郷仁位村給人

平松登藏

右は御巡検使、是迄之御宿当不宜候付、此節居宅御借替被成候処、当時之御時体令感服、銀式百匁御加勢筋申出、御吹籠マユ之事、則居宅御普請入料之内ニ被差加候、此旨可被申渡候、以上

四月八日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

襖・障子

表門

冠貫

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

御巡檢使御宿々御本間之儀は、襖・障子共掛金用意、御府内よりしまりいたし候様、致手当可被置候

一、右御宿々納戸之儀は、御用人詰所ニ可相成候間、畳替は勿論板敷等之分は、新ニ畳敷入、不見苦様取繕可被置候

一、御宿々表門在来之分、鋪扉無之処は、新規ニ可被出来候

一、此節取建ニ相成候冠貫門之分も、鋪扉出来候様可被致候

一、しるくみ制札之儀

御巡檢使、田舎御往還之節、取除置候様可被為差図候

右之通、夫々可被致手当候、以上

四月八日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

欄間

表御目付

谷織之輔

右は田舎御宿々御普請被仰付候処、不都束之場所所有之候付、取締、且深山村・仁位村御本陣之内振替候付、右御普請方え被相付、下村被仰付候

作事方手代

森甚兵衛

右同断二付、被差下候間、御費筋無之様入念可相勤候

右之通可被申渡候、以上

四月八日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田しま所左衛門殿

大目付中

可被得其意候

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御巡檢使、田舎御宿々本座・長押二欄間無之処は、不見苦様手輕欄間入候様可被取計候  
右は、口達書右馬助殿より吉村儀右衛門え御渡被成候、御作事方え相達置候事

於勝本御達、御用達ヨリ御用之品時宜ニヨリ借船を以申越候儀可有之旨、乾一郎兵衛ヨリ伺出承届置候間、可被得其意候

足輕 文吉

同御雇 善兵衛

御巡檢使御送

右は御巡檢使御送として、被召仕候幾度又右衛門勝本え被召仕候付人申付候、以上

四月十四日

御勘定奉行所樋口彈正

御郡奉行

御郡奉行

多田左柄

右は御巡檢使御用掛被仰付置、最前田舎御宿々為見分被差下候節、吟味方不行届之儀有之、右御用掛此節被差免候、以上

四月十四日

御勘定奉行所樋口彈正

御持筒

長右衛門

御鉄砲

伊兵衛

御荷物才領

御巡檢使馬措  
御旗

市右衛門

又右衛門

足輕

新七

格左衛門

御鉄砲

与五右衛門

御道具

惣八

久兵衛

御草取

久兵衛

御厩

出平

御駕籠

又右衛門

右之通申付候、以上

四月十四日

勘定奉行所樋口弾正

杉村入佐之輔

火消番

右は御巡檢使火消番被仰付置候処、病氣依願被差免候

鈴木政右衛門

右同断、病氣依願被差免候

加城六之進

右は御巡檢使御宿之御使者被仰付置候処、病氣依願被差免候

樋口源左衛門

右は高瀬外記為代、御巡檢使御宿之御使者被仰付候

樋口監物

若殿様

右は番柳右衛門為代、従若殿様御巡檢使御宿之御使者被仰付候、以上

四月十四日

勘定奉行所樋口弾正

御附廻役

田舎御巡檢之節、御附廻役々之被相渡候郡夫之儀、各中之拾壹人、内駕籠舁夫六人、御用達之三人之内乗馬口付二人、御郡役之二人、人馬下知役之壹人、都合十一人は先格之通、通夫二申

人夫

駕籠昇夫

付、中馬口取同様之賃銀被下之候、以上

四月十三日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

上使御巡檢之節、郷々ヨリ被召仕人夫之儀、江戸御発駕之日ヨリ廿三日ヨリ御駕籠昇夫御呼登、中馬口付は三十日目、御宿人足は四十三日、此日限之積を以御呼登被成候先規と相見申候処、未夕御発駕之御左右御到来無御座候得共、当月初旬御発駕之御積之由被仰付置候得共、弥右御達通ニ御発駕ニ相成居候時は、御駕籠昇夫等之上府被仰付、稽古方申付候様被仰付如何可在御座哉、中馬口付夫之儀も鞍之置様、飼料等之稽古等有之候事と相聞申候得は、右両様之夫は一先ツ上府被仰付、稽古方於其筋指南有之候様被仰付置、御下着方御間も有之候御様子二も御座候は、帰村被仰付候て、追々御呼登被仰付如何可在之候哉、何れとも御差図被成被下候様奉希候、此段為可申上如此御座候、以上

四月十日

御勘定奉行所

杉村右馬助様

田嶋左近右衛門様

御付紙

書面之通可被取計候、以上

四月十三日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

可被得其意候

嶋居正左衛門殿

早田安賀之介殿

大人夫

藥物

御巡檢使ニ付てハ、大人夫之被召仕御座候得は、右之内万一病氣・怪我人等有之候節之為、前以も従上藥物御渡被成下候御事と相見、寛政年ニは紙末之藥物御渡置被下候様申上、扱又御通筋御茶屋えも御備藥物御渡被為置候哉之段をも御伺申上候趣、記録ニ相見申候、此度も用心物御渡被下候様奉希候、尤取遣不申分は追て返上為仕候、此段為可申上如此御座候、以上

四月十日

御郡奉行所

杉村右馬助様

田嶋左近右衛門様

人参

一、人参 二袋

一、清心丸 六丸

一、万能膏 六具

一、百勝丸 拾貳袋

以上

御付紙

書面之通、薬物御渡被下候、以上

四月十三日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

薬物用意、夫々二可被相渡候

藤正左衛門殿

早田安賀之介殿

可被得其意候

総人数

一、総人数 四拾人

内、用人 貳人

池田乙右衛門

関真平

藤崎喜内

給人 參人

佐藤善兵衛

祐筆 壹人

高橋弥兵衛

近習 六人

┌  
中小姓

徒 五人

足輕 七人

中間 拾六人

一、精進日、毎月十日

右、曾我又左衛門様分

精進日  
曾我又左衛門

共人数

一、共人数參拾人、尤少々増減可有之候

一、公儀御精進日外、六日・十八日朝計精進

一、家老召連不申、給人貳人、勝手方壹人、近習・中小姓六人、徒四人、足輕六人、手廻中間

拾參人程

用人

下澤喜多録

安藤善右衛門

大久保勘三郎

右、大久保勘三郎様分

総人数

一、供総人数参拾四人

内、用人 貳人

給人 貳人

近習 七人

中小姓

徒 参人

足輕 貳拾人

中間

一、御用掛置候家来

桑原栄蔵

小野東馬

一、四月上旬、当表致発足候

一、道順之儀、先規之通筑前・肥前・杵岐、夫ヨリ対州え罷越候

一、公儀御精進日之外、五日当朝計精進御座候

一、持参之道具

持参之道具

長持 貳棹

具足櫃 壹棹

茶・弁当 壹荷

精進日

近藤勘七郎

両掛 式荷

合羽籠 式荷

竹馬 参荷

提灯籠 壺棹

供駕籠 式挺

右、近藤勘七郎様分

右之通、今度江戸表ヨリ申来候付、可被得其意候、尤侍中以下御巡檢吏ニ拘候者共御用人名前  
附居候は、当時致名改候様可被申付候、以上

四月十三日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

大目付中

町奉行中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

御用達中

早田安賀之介殿

享保

宝曆

大山村

家数も少

御宿絵図

享保年御巡檢使之節、大山村え御下着之上、御下宿式軒つ、二ては差支候由にて、妻木平四郎様え式軒相増、都合下宿參軒、小倉忠右衛門様は、御手当被置候通下宿式軒にて相濟候由、依之上之郷共ニ御下夕宿壹軒充相増候様、俄ニ相達越候由、延享年ニも御手当之外ニ下夕宿壹軒つ、相増置候様触下たる段、留書ニ相見申候、宝曆年ニは、大山村之御下夕宿は、三軒ツ、も御手当と相見、寛政年は最初二軒ツ、之御手当ニ候得共、手狭成家も有之、御三方様にて御下宿都合八軒之御手当ニ被仰付度之段、御伺申上居候段留書ニ相見申候、当節も先形之通御下夕宿式軒充、都合六軒之御手当ニ御座候処、大山村之儀は、家居何れも別て手狭ニ相見申候間、前々申上候通、自然御下着之上俄ニ相設候様之振合ニ至候ては、彼是御不都合成儀と奉存候、併同村之儀、家数も少候得は、急ニ繰為替相成不申候付、只今仮建を相設、御国御役々之宿ニ手当被仰付、御用心之為、御下宿を一二軒御備被置、如何可在御座候哉、左候得は右大山村ニ不限、御下宿手狭ニ相見候村々えは、何方も同様御手当無之候て難叶相見、段々御手当方大造ニ相成候様ニ御座候得は、先例留書之様子を以は、村方ニ依急ニ御下宿相設候様相成候ては、甚以当惑仕候次第ニ御座候間、此段奉伺之候、猶先々之御宿絵図と此節之絵図面を以其筋にて御考合有之候は、広狭之間委敷相分可申候間、御吟味之上、早々何れ共被仰出被下度奉存候、

此段為令申上如是御座候、以上

猶以申上候、上吏様御一行上下人数之多少ニも依り、御宿差支之有無可在之候付、彼是御賢考  
宜被仰出可被下候、以上

四月十一日

御郡奉行所

杉村右馬助様

田嶋左近右衛門様

御付紙

書面之通申談、御不都合之儀等無之様可被取計候、以上

四月十四日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

小川太三郎

右は御巡檢使御宿番被仰付置候処、病氣ニ付被差免候、以上

四月十八日

御勘定奉行所樋口彈正

御宿番

火消番

平田大江

浅井與左衛門

右は杉村入佐之輔・鈴木政右衛門為代、御巡檢使ニ付火消番被仰付候

島雄權右衛門

右は加城六之進為代、御巡檢使御宿え之御使者被仰付候

馬医

志田左右作

右は御巡檢使御下向ニ付、田舎御附廻被仰付候、以上

四月十七日

御勘定奉行所樋口弾正

御巡檢使ニ付

浜崎

浜崎え被召仕候付

川邊一角

用心金可被相渡候

右御口達書、右馬助殿ヨリ藤正左衛門え御渡被成

御巡檢使御送被

御用達

仰付置候付、御渡物

幾度又右衛門

乾一郎兵衛通被仰付候

右同断

馬具類

大坂注文

以手紙申達候、御巡檢使御用御馬具類、大坂注文ニ相成居候処、今以下来不申、不得止御在合之古御馬具取調、致吟味差掛御備相立置可申段、御馬方ヨリ申出候間、其方達内忝人、明廿日四ツ時、御馬方え被罷出可被遂見分、此段為可申達如此候、以上

四月十九日

杉村右馬助

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門

右二付、吉村儀右衛門罷越候

銀貳百枚

銀貳百枚

八郷 百姓中

右は今般巡檢上使御下向ニ付ては、召仕方繁く專出精せしめ候と相聞、一日限御用向其善之儀ながら、奇特之事ニ候間、当節も寛政年之通御憐愍之被仰出も有之、人夫被召仕方以前ヨリも減も可有之、誠御時体ニ随、都て減縮之事不容易儀ながら、臨時役々往来も繁く、別て令苦勞候事と申、先形も在之儀、旁先右之通被下之候、猶骨折を不厭、無御用滞令出精候様、懇ニ可被申付候、以上

中馬六疋

四月廿日

御郡奉行所 可被得其意候、御逗留之事故、御郡奉行申談、何分都合能可被取計候  
御勘定奉行所

御巡検使二付、御入用之中馬六疋、御借人馬主預且御買上之積共二紙末書載、奉入御覽二候、  
尤乍當時御買入之方御便利ニ相見申候、此段如何共可被仰付候哉、奉伺之候、以上

四月十六日

御馬方

覚

一、九錢 五百四拾匁

但中馬六疋、御借入一日壹疋ニ付九錢三匁ツ、日数三十日と積ニして如斯

一、同 四百八拾匁

但中馬六疋、田舎御付廻、日数十日と見テ、一日壹疋之人馬賃錢九錢八匁ツ、ニして

一、同 五拾匁

但中馬六疋、請負之者一人、田舎御下り申者被召仕候先形と相見ニ付、此者一日壹人賃

錢九錢 五匁ツ、ニして、日数十日と見テ如斯

三口メ 九錢壹貫七拾匁

中馬請負

御買入代

一、荒麦 壹石貳斗

一、粉糠 壹石貳斗

但中馬六疋田舎御下り中、一日壹疋貳升ツ、十日分如斯

一、青草 見計

但上馬・中馬投草用

此三口、田舎御泊りくく之御場所へ御備被下置候分

外ニ

一、中馬請負之者壹人、馬主六人、田舎御附廻中飯米は、上ヨリ炊出し被仰付候事

右之通、馬主預ニして御借上被成下候は無御用欠様、浜馬方松兵衛御請物可申上段申出ル

一、九銭 壹貫貳百匁

但中馬六疋御買入代、壹疋九銭貳百匁ツ、ニして如斯

一、同 百六拾貳匁

但中馬六疋、一日壹疋、朝鮮俵參俵ツ、切藁飼して、壹俵ニ付九銭參分位と見テ、壹日

壹疋九銭九分、三十日分、如此

一、同 五拾四匁

但一日一疋ニ付粕六百匁ツ、ニして、九銭參分ツ、ニして日数同断

朝鮮俵  
魚油

三口、九錢壹貫四百六拾匁

内、九百匁

但中馬六疋、御用濟之上馬主一疋九錢百五拾匁ツ、ニして、御売戻被仰付候として、御取入馬之分如斯ニして、九錢五百拾六匁

外ニ

一、夫 壹人 但飼料之朝鮮俵切夫用

一、魚油壹升貳合 但有明一日、一ヶ月燈用

一、夫 六人 但田舎御附廻中馬六疋、御賄用郷夫如此

此三口、御買入之上御増渡被下候分如此

一、九錢 壹貫七拾匁

但馬主預ニして、御借上之積如此

一、同 五百拾六匁

但御買入之上、御立込之此積ニして如斯

右兩段、積合見候処、御買上之分、凡九錢五百五拾四分御徳分ニ相見申候、猶何れも御賢慮次第、御差図被仰付可被成下候

御付紙

中馬六疋御買上之方、御便利之算当ニ相見候間、則御買上被仰付候、尤飼料之俵切夫之儀は、中馬相立候日より増竈之者召抱候様ニ可被取計候、以上

四月廿日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

嶋居正左衛門殿

御郡奉行所

可被得其意候

御勘定奉行所

口上覚

町書手一人

月銀四拾五匁

勝本

御巡檢使ニ付、町書手一人御迎御用達え被相付、勝本え罷成候儀も在之、吟味名前申出候様と之御事ニ御座候処、如何之御宛行ニ可被仰付哉、尤壹ヶ月銀四拾五匁、旅籠銀御合力銀拾參匁三分、船中飯米四合五勺乗船之日より船中計被下候と之儀、宝曆年之記ニ相見申候、是は旅行ニ付、旅籠代ニ被下と相見申候ニ付、賃金ニ相当申間敷候、右之旅籠ニ仕候は、宝曆年より数十ヶ年相隔り、勝本と申候ても旅ニ相成候事故、近來之如く諸色高直ニては、迎も右之通計ニては相望候者も在之間布奉存候、此節は御宛行等如何可被仰付候や急ニ吟味仕可申候、相望候者御座候時、御宛行如何程と申儀為申聞相極り申候事故、忝州逗留中何程、帰国之上御用中何程被下候と申儀被仰出被下度奉希候、此段為可申上如此御座候、以上

三月

遠藤忠蔵

御町奉行所

前川李兵衛

御付紙

御用達書手

壹人

一、銀拾参匁参分参厘

但御国にて初發御渡ニは、銀にて被下、旅中にて御渡ニ相成候分は、正銀にて御渡被下候

一、勝本逗留中、旅籠正銀壹匁五分ツ、

一、往來船中、飯米四合五勺ツ、

右之通、御渡し被下候間、吟味之上急速申付候様可被取計候、以上

四月廿一日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

嶋居正左衛門殿

町奉行中

御勘定奉行所

可被得其意候

御通筋

石垣取繕方

表門外通

御巡檢吏御下向ニ付、御通筋御見掛之場所、居宅且表門等及大破居候面之取繕ニ付、追々拝借筋願出候人在之、御時勢仮成ニも御備相立候丈ニ候得は、相当之拝借も可被仰付儀ながら、御行詰之此場、最早上使御発駕ニも可相成居御日積ニ候得とも、未夕御手当全備ニ不至、御苦念之事ニ候、依之何れも願書差返、上ヨリ御取繕被下、右御入料之分御本意ならざる儀ながら、当盆季石麦を以皆済引取上納被仰付候積候、就夫従上御取繕被下候御入料御渡被下候ハ、尚又此上之作略相尽、於身分取繕いたし度相心得候人も可有之事故、上より之御取繕方御勘定奉行所承合、いつれとも彼役所及談合、御間答能出来方可被相違候、尤此末右同様之訳、或は石垣取繕方等ニ至り、拝借筋願出候人有之候共、右同様之御取計ニ候間、是又相心得可被置候

四月十六日

表門外通、御見障ニ不相成丈、軒口瓦落掛居候分而已押付、  
壁之儀も落崩居候分計押直しと申取繕ニ候間、入料之儀御  
勘定所承合、いつれニも可被相心得候事

吉川内記

両家共、松木を以冠貫門両開ニして、掛金閉しめニして、  
内衣袖柱立ニ出来候事

小川三四郎

右入料、総入目銀百参匁九厘貳毛也

杉村又左衛門

火消番所

三根郷

草史屋

右は御巡検使二付、火消番詰所二座廻り御借上被成候、此旨可被申付候、以上

四月廿三日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

火消番之面々え相達可被置候

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

古川将監

右は御巡検使近々御下向二付、右之御用筋被承之候様被仰付候

田嶋左近右衛門

右同断、御用筋被承候様被仰付置候処、病氣願之品ニ依被差免候

右之通可被得其意候、以上

四月廿四日

年寄中

田嶋所左衛門殿

大目付中

町奉行中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

島居正左衛門殿

朝鮮方頭役・御役中

幾度又左衛門殿

早田安賀之介殿

船役頭役・御役中

御附廻

田舎御巡檢中、各中内御附廻之儀、於勝本御用達ヨリ及御伺筈ニ候、自然寛政之通御附廻之儀無用仕候様被仰出候時、郷方取締之為、右馬助下村之筈ニ候条、可被得其意候、以上

四月十四日

田嶋所左衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

御宿番人

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御用達中

早田安賀之介殿

内野佐兵衛

神宮哲助

右は田中万兵衛・小川太三郎為代、御巡検使御宿番人被仰付候

作事掛

古川武左衛門

同手代

三木田経右衛門

御勘定手代

内山繁左衛門

賄掛

川本茂十郎

井常右衛門

右は御巡檢使、田舎御附廻被仰付候事

賄掛

高山範之介

右同断二付、鶏知村え被差下候

俵数馬之介

火消番

右は平田大江為代、御巡檢使二付火消番被仰付候

井上左衛門

波戸御番所

右は御巡檢使二付、波戸御番所詰被仰付置候処被差免、鳥雄權右衛門為代、御宿之之御使者被仰付候

平山田龍

右は吉引令庵為代、御巡檢使御用承、田舎御附廻共被仰付候

河内孫七

右は武田統為代、御巡檢使二付久田村仮番所被仰付候

箕原喜七郎

右は梅野右七為代、御巡檢使二付於田舎旅籠賄下知被仰付候

和瀧藤左衛門

田舎え夜具

右は松田久米輔為代、御巡檢使御家来衆頼二依、田舎え夜具被差下候節、支配人被仰付候

四月廿四日

御勘定奉行所樋口弾正

御立退場

曾我又左衛門様

三浦沢之助宅

大久保勘三郎様

杉村入佐之輔宅

近藤勘七郎様

敷柳左衛門宅

右之通御巡検使御逗留中、若、出火在之節、御立退場ニ被仰付置候、御荷物入所之儀は、先達て申達置候浜一番之御蔵にて候、持夫は御駕籠舁三十人、町ヨリ弍拾人、御米蔵御郡浜、馬方ヨリ拾人罷出候、夫を以可被為相運、籠夫御荷物之儀少之品たりとも、間違之筋有之候ては、至て大切之事候間、下知方手配等兼て被相心得置、手廻宜敷様可被致差図候、以上

四月廿四日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

掛役々え可被相達候

吉村儀右衛門殿

本文之通申渡候間、御蔵戸前寔等塗候儀

藤正左衛門殿

御作事方へ可被申渡候

町奉行中

御用達中

可被得其意候

早田安賀之助殿

仁位孫右衛門

綱浦在番

右は井上左衛門為代、御巡檢使二付波戸番所詰被仰付候

井野六左衛門

右は吉田兵右衛門為代、同断二付久田村假番所詰被仰付候

奥御目付

根ノ興左衛門

右は御巡檢使二付、綱浦在番被仰付候

古川将監殿

右御巡檢使近々御下向二付、右之御用筋被承之候様被蒙仰付候

田嶋左近右衛門殿

右同断、御用筋被承候様被仰付置候処、病氣依願御免被蒙仰候、以上

四月廿四日

御勘定奉行所樋口彈正

人馬方手代

右は森甚兵衛為代、人馬方手代被仰付候

米田惣之助

武田続

右は御巡檢使二付、久田假番所詰被仰付置候処、病氣依願被差免候

鳴雄権右衛門

右は加城六之進為代、御巡檢使御宿え之御使者被仰付置候処、病氣依願被差免候

梅野右七

右は御巡檢使御下向二付、田舎ニおゐて旅籠被相望候節、諸下知被仰付置候処、病氣依願被差免候

吉弘令庵

右は平山元升為代、御巡檢使御病用達、且田舎御附廻共二被仰付置候処、病氣依願被差免候

平田大江

火消番

右は今般御巡檢御下向二付、火消番被仰付置候処、病氣依願被差免候

春田久米輔

田舎え夜具

右は御巡檢使二付御家中衆依願、田舎え夜具被差下候節之差配人被仰付候処、病氣依願被差免候、以上

四月廿一日

御勘定奉行所樋口弾正

平山田龍

右は吉弘令庵為代、御巡檢使御用承、田舎附廻共被仰付置候処、病氣依願被差免候

御駕籠組

御巡檢使二付

御駕籠組人少二て

差支候付、御用濟迄

御雇申付候

右之通申付候

小川三四郎

家内改

安右衛門

御駕籠弥右衛門

伯父改

忠助

十王町改 国分幸右衛門甥

利三郎

御道具清右衛門

伯父改

清八

日帳付

大島廣吉

上原隆右衛門

右は御巡檢使御用掛被仰付置候処、御祐筆人繰も在之候付、当節は右兩人田舎御附廻被仰付候

交代与頭席

小野十郎兵衛

御鉄砲頭

原四郎左衛門

金石御城

右は今般巡檢上使御下向二付、金石御城之唱初て之儀ニ在之、万一御尋之品も可有之候付、御

答向之為、当時御城番被仰付候、是迄御城番被仰付置候御城内住居之面々、此節巡檢上使御下

向ニ相成候付ては、是迄之御城番之儀、自今御城定番と銘目御改被成候

御旗五右衛門事

当時改名申付候

傳吉

右之通申付候

吉弘令庵

右は平山田籠為代、御巡検使御用承、田舎御付廻共被仰付候

四月廿五日

御勘定奉行所樋口弾正

馬指之者

馬指之者

御荷物宰領之者

御駕籠廻小頭之者

右は骨折候勤柄二付、別段之訳を以定式御渡物外、滞米之内ヨリ壹斗壹升壹合壹勺壹才充、御渡被下候、此旨可被申付候、以上

四月廿五日

杉村右馬助

古川将監

早田安賀之助殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

中馬

口付夫

御巡檢使御用中馬、紙末之者共所持之馬、先般御伺申上置候通、九錢貳百匁にて御買上御用濟之上は、同百五拾匁にて馬主へ御買戻被仰付候段相達候處、斯御重太之御用筋二付、九錢百匁にして、御売上申上置、御用濟之上五拾匁上納可仕段申出、輕者共二は殊勝之心得方二付、御用濟之上は申上方も可有御座、御買上方之儀、來ル廿七日牽登候様御手筋へ御達被成下度奉存候、口付夫之儀外郷村へ御差当二も相成居可申候得共、外之者大様二取扱、曲等出候時は、後日難召仕、依之是迄御手当二相成居候口付之者は被差免、右馬主共口付夫へ被召仕被成下候様願出申候、自然右之通不被仰付節は、御買上方御断申上候段願出申候間、可然御差図被成下度奉存候、以上

四月廿五日

御馬方

〔頭注〕御付紙

承届候、申出之通を以中馬御買入、且口付夫二至申出之通被仰付候

四月廿五日

杉村右馬助

古川将監

島居正左衛門殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

高崎翼殿

覚

一、鶴毛 久田村 百姓 源助

鹿毛 一、鹿毛 同村 同 重吉

一、同毛 尾浦村 同 清右衛門

栗毛 一、栗毛 同村 同 仁左衛門

一、鹿毛 小浦村 同 源右衛門

一、同毛 小茂田村同 松太郎

以上

下目付

孫七

網浦在番 右は御巡検使二付、御目付根ノ与左衛門網浦在番被仰付候付、右之者相附差下候間、御渡物等

其筋之御差函被成度存候、以上

四月廿六日 御勘定奉行所吉田大臈

田舎御宿

上使田舎御宿々并御下宿其外御通筋道作り共ニ、昨今迄ニは成就仕可申奉存候付、猶又口々御  
手当為取調、此御役所手代役廻村被仰付候段申渡、稲留十八儀昨日出立仕候間、御止宿之村々

道作人

廻村之手代

取設方段々見分仕、出来方之様子申為登候は、先規之通御宿々且道作り成就為見分、私共内ヨリ上ミ六郷之廻村被仰付候、御先方にて寛政年ニハ御作事掛咄人、并御駕籠小頭咄人、道見分之節罷下候者被差下方御伺申上候儀記録ニ相見申候、当節は右之銘々被差下方如何可被仰付候哉、廻村之手代役ヨリ御宿村之様子申為登候上にて、下村方日取之儀は、申上候様可仕候、尤今程御作事方役々廻村御普請申ニハ御座候へ共、六郷共ニ相濟候上にて、成就見分被差下候様相成候ては、万事即後ニも可相成哉と奉存候付、右之趣御伺申上候間、何れ共御差図被成下度奉存候、右申上候通御作事掛、且ツ御駕籠小頭共ニ被差下御事ニ御座候ハ、御手筋を以夫々被仰達置被下度、此段為可申上如此御座候、以上

四月廿三日

御郡奉行所

杉村右馬助殿

田嶋左近右衛門殿

御付紙

道造見分

見届候、田舎御宿々、且道造見分相兼下村可有之候、作事掛之儀は、不被差下候ニ付、御駕籠小頭被差下候間、可被其意得候、以上

四月廿五日

杉村右馬助

古川将監

高崎翼殿

御用人中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

先般被差下候御駕籠小頭下村方可被申付候

可被其意候

七五三廣右衛門

火消番

右は御巡検使ニ付、火消番勤被仰付置候処、病氣依願右勤被差免候

佐治英之丞

右は七五三廣右衛門為代、御巡検使ニ付火消番被仰付候

河村茂左衛門

久田村仮番所

右は今般御巡検使、久田村仮番所詰被仰付置候処、病氣依願右勤被差免候

田中伊兵衛

相良條左衛門

右は御巡検使ニ付、河村茂左衛門・河村孫七為代、久田村仮番所詰被仰付候、以上

四月廿一日

私屋敷前

泥路

梅雨

御手入筋

御巡檢使御下向ニ付、自分居屋敷構は素り、道筋不見苦様相心得候段御触達之趣奉畏罷在候、然処私屋敷前道筋之儀ハ、五月頃ヨリ九月ニ至り候迄、山手ヨリ出水有之、五六ヶ月之間凡拾四五間全泥路と罷成、是迄積年及心自力を以相補候得共、第一田舎人馬之往還繁多ニ有之、造作相届得不申、既ニ拾ヶ年以前其段奉願郷普請ニ被仰付、道川役野田平内・佐伯市左衛門差配を以仮成ニ相成居候処、最早年数隔、昨今年は又々如以前、泥路甚敷御座候故、飛石・古板等置候て辛ク通行仕候儀ニ御座候、尤只今頃は乾居、少之憂も無御座候得共、梅雨ニ差掛候得は、右申上候通之泥路ニ罷成申候、夫ニ付御手入筋奉願候段、御時曲柄と申、重疊恐多奉存候得共、今度御巡檢使御下着頃は、果て梅雨ニも差臨ニ可申哉、左候時は決て御通駕相成候場所ニ無御座、此場所自力を以、如以前取償度御座候得とも、平常之節冬ニ願出、郷普請ニ被仰付候程之場所ニ御座候得共、当節は御訳も被為違候儀ニ付、何卒上ヨリ右之場所拾四五間二限、御造作被仰付被下候ハ、千万難有可奉存候、此段御序之刻宜被仰上、願之趣貫通仕候様、御執成偏奉願候、以上

中江類右衛門

四月廿日

中江類右衛門

御与頭中様

御付紙

見届候、御巡檢使御通駕之際ニ至り、其筋見分之上見苦候は御取繕可被下候、此旨可被申渡候、

以上

四月廿五日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

得其意、作事方之手を以相応取繕候様可被取計候

藤正左衛門殿

仁位孫右衛門

波戸御番所

右は御巡検使二付、波戸御番所詰被仰付置候処、病氣依願被差免候

築城糺

右は御巡検使二付、波戸御番所詰仁位孫右衛門為代被仰付候

末松吉右衛門

右は御巡検使二付、火消番被仰付置候処、病氣依願被差免候

大浦次郎兵衛

右は御巡検使二付、火消番末松吉右衛門為代被仰付候

根ノ與左衛門

右は御巡検使二付、網浦在番被仰付置候処、病氣依願被差免候

綱浦在番

奥御目付

田中庄右衛門

右は御巡檢使二付、綱浦在番根ノ與左衛門為代被仰付候、以上

四月廿七日

御勘定奉行所樋口彈正

三根郷

草使屋

右は御巡檢使二付、火消番詰所二座廻り御借上被成候、此旨可被申付候、以上

四月廿三日

田嶋左近右衛門

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

火消番之面々え相達可被置候

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

文学院・行徳院

文学院・行徳院より手筋を以願出候は、今度巡檢上使御下向二付、遠見御番所之罷出候様ニ被仰付奉畏、昨日ヨリ罷出罷在候、然処数日之儀無扶持之身分難儀仕候付、文化年信使之節奉願、

飯米

壹日壹人白米壹升ツ、飯米被成下、馬上挑灯弍張、夫壹人御渡被成下候付、当節迎も同様之訳  
ニ付、御勘定奉行所え申出候処、先例無之候間、御渡ニ不相成と之御事故、何卒信使之節同様  
ニ被仰付被成下候様と之書面

御付紙

見届候、無余儀相聞候付、兼て相達置候通、筑前若松御着之御左右到来之上、遠見番所え壹人  
相詰候日ヨリ白米壹升、挑灯弍張、夫之者壹人御渡可被下候、此旨以手筋可被相達候、以上

四月廿八日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

御駕籠組

御巡検使ニ付、御駕籠組人少

杉村司家内改

御雇

差支候付、御用済迄御雇申付

市郎衛

右之通申付候

火消番

山下覚之丞

右は御巡檢使二付、火消番築城糺為代被仰付候

阿比留多郎衛

右同断二付、田舎旅籠賄下知永留宇左衛門為代被仰付候

棧原直右衛門

右同断二付、久田村仮番所詰田中伊兵衛為代被仰付候

御郡御役

龍田右兵衛

右同断二付、於田舎人馬船出方下知被仰付候

田中伊兵衛

右同断二付、久田村仮番所詰被仰付置候処、病氣依願被差免候

永留宇左衛門

右同断二付、田舎御付廻り賄旅籠下知被仰付置候処、病氣依願被差免候、以上

四月廿一日

御勘定奉行所樋口彈正

御船奉行所

賃銭・飯米

御船奉行所ヨリ頭漕三十人之儀、御待請之備ニ相成候付、勝本御着之日ヨリ賃銀六錢壹匁五分

ニ飯米壹升ツ、御入船当日は賃銭六錢參匁ニ飯米壹升差出方之儀、御掛合ニ付、先形吟味申

町用銀

勝本御着

水夫参拾人

出候様との御儀ニ付、先形吟味仕候処、宝曆年は町ヨリ差出候儀は御免被仰付、寛政年ニは御入船当日計壹人前六錢参匁ツ、町用銀之内ヨリ相渡候様相見申候、是迄町ヨリ差出候様乗組之者以前ヨリ飯米相渡候儀相見え不申候、尤御待請之儀は、先形ニは相見不申候得共、五拾ヶ年以前之如ニては、可被相雇候者も無之は勿論ニ御座候間、御待請賃銀之儀願奉候処、御付紙を以乗組人数四拾八人之内、参拾人は町之請前ニて、賃銀飯米町ヨリ取立来と候相見申候付、先形之通可被相心得候との御達奉畏候、然処右賃銀は、寛政年町用銀ヨリ相渡有之、町ヨリ之取立ニハ無御座候、飯米之儀は前ニも有之通、町ヨリ乗組之者え相渡申候例無御座候、此節ニ限り、勝本御着御左右御到来之日ヨリ御待請之賃銀は、町用銀ヨリ相渡候様被仰付可被成下候様奉願候、此段為可申上如此御座候、以上

四月

遠藤忠蔵

前川松兵衛

御町奉行所

御付紙

頭漕水夫参拾人飯米之儀、当節は従上、壹日壹人八合ツ、御渡被下候間、賃銀之儀は当節二限り町用銀ヨリ可被相渡候

四月廿八日

杉村右馬助

古川将監

大目付

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

箕原九八郎殿

大目付

吉田大臈

上下拾壹人

騎馬

右は御巡檢使御着船、御発船共二寛政年之通、年寄中浜え不罷出筈二付、為御締右之行粧にて  
罷出候様及差図置候間、可被得其意候、以上

四月廿九日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

仁位格兵衛殿

嶋居正左衛門殿

御用達中

早田安賀之介殿

朝鮮

先般於朝鮮、彼国之者對州之役人え何角異成ル真文差出候儀、為在之と相聞、其者ハ何と御取計、書面は如何様之儀相認居候哉と御尋有之候ハ、私共ニハ其役筋ニ不相拘事故、何等之儀も相心得居不申旨、御答可被申上候

牢屋

一、在方え牢屋有之哉と御尋有之候ハ、在方ニは牢屋無之段御答可被申、若今程牢屋有之由承居候段御尋も候は、牢屋ニては無御座、囲体之ものニ候と御答仕、誰も入居候人有之哉と御尋も候ハ、入居候人有之段御答申上、如何体之儀ニて囲入被申付候哉と御尋有之候ハ、其訳存知不申由御答可被申上候

右之趣、能々相心得居、御答向行違無之様、預之筋々下々え申付可被置候、以上

四月廿九日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

大目付中

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿 付廻二て午之下刻御用達え差廻ス

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

御用達中

船改頭役・御役中

早田安賀之介殿

田舎御廻村

御巡検使田舎御廻村 下目付

之節、御付廻御年寄中付 市右衛門

同

右同断二付田舎く 市兵衛

売物方 売物方之被相付 喜兵衛

右之通、田舎下申付候、以上

四月晦日

御勘定奉行所吉田大臈

銀拾兩

杉村右馬助

久田村売物方

右は御巡検使御用引切承り、田舎廻郷をも被仰付候事故、御内々右之通ニ被成下候間、可被得  
其意候

四月晦日

古川将監

御勘定奉行所

青柳善右衛門

右は打廻頭兼勤之面々差支候付、御巡検使御下向中打廻頭添役被仰付候

四月晦日

御勘定奉行所樋口弾正

御徒士目付

永留久右衛門

右は御巡検使御下向ニ付、久田村売物方え被相付候段、被仰付置候処、御関所勤番可被差下候  
付、被差免候

同

早田佐兵衛

右は永留久右衛門為代、久田村売物方え被相付候

同仮役

倉掛与介

右は御巡検使田舎御往還之節、御先え相立候行規人被仰付置候処、此節御関所跡在番被仰付候  
付被差免候

同

信田大作

右は御巡検使御出立前浜ヨリ棧原迄御通筋行規人被仰付置候処被差免、倉掛与介為代、田舎御  
往還之節御先え相立候行規人被仰付候

同

黒岩十左衛門

右は御巡検使田舎往還之節、御先え相立候行規人被仰付置候処被差免、信田大作為代御出立前  
浜ヨリ棧原迄御通筋行規人被仰付候

同

永留小枝

右は黒岩十左衛門為代、御巡検使田舎御往還之節、御先え相立候行規人被仰付候

四月廿八日

御勘定奉行所樋口弾正

御用意方

御巡検使江戸表御発駕之日限間合候処、四月朔日御出立之積ニ候旨申来候、然時は最早御着船  
御間は無之事故、諸手当方随分差急、来ル五日迄何分出来候様ニ可被致出精候、尤御用意方相

旅籠錢

揃候分は、其旨可被申聞候、已上

閏四月朔日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

大目付中

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

嶋居正左衛門殿

早田安賀之介殿

船改頭役・御役中

御巡検使田舎御付廻御家中役々旅籠錢、壹匁五分ツ、但組之者并下人えは田舎村々ニおゐて一日壹人ニ米七合五勺、味噌参拾目ツ、被成下候、尤町人役々之旅籠錢賃銀等、此度も先規之通被成下候間、得其意、夫々可被申渡候、以上

閏四月二日

杉村右馬助

古川将監

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

仁位格兵衛殿

町人役々旅籠錢之儀、可被得其意候

御宿番人

来六日ヨリ、御巡檢使御宿番人勤掛被仰付候間、夫之者其外入用之諸品先規之通可被相渡候、以上

閏四月二日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

小田清藏

国分加右衛門

右は御巡檢使二付、人馬方手代中村久七・信田武右衛門為代被仰付候

松田畦之介

鶴岡茂兵衛

勝山善兵衛

右は御巡檢使御家中衆為御先番揚陸有之節、手引被仰付候

人馬方手代

信田武右衛門

中村久七

右之面々御巡檢使ニ付、人馬方手代被仰付置候処、病氣依願被差免候

閏四月朔日

御勘定奉行所樋口亘理

信田武右衛門

右は御巡檢使ニ付、於田舎旅籠賄下知阿比留多兵衛為代被仰付候

柴田昇軒

右同断、御付廻被仰付候処、病氣依願被差免候

阿比留多兵衛

右同断、田舎旅籠賄下知被仰付置候処、病氣依願被差免候

妻瀬正斎

右は御匙医添番之内、御巡檢使御用承り田舎御付廻被仰付候

御匙医

御宿々御普請成就ニ至り候付、今二日御用掛之各中を初以下役々罷越候事

右、右馬助殿ヨリ正左衛門え御口達

諸品飾付

御巡檢使、府内・田舎共御宿御座飾之儀、先ッ飾付不及、御勝手之致用意置候様相達置候、然  
於勝本、松浦肥前守様ヨリ御取設之振、此節申来候、品ニ依当節は、宝曆年之通諸品飾付置  
候様可被致候、尤御着座之上、取除方御注文も在之候ハ、御差図通無異議可被相心得候  
右之趣、預之銘々え夫々可被相達候

閏四月二日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

仁位格兵衛殿

高崎翼殿

可被得其意候

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

御用達中

御巡檢使二付、田舎御付廻之人、府内御逗留中相勤候役々上下并宿組別帳式冊之通被仰付候間、  
被得其意夫々可被申渡候、以上

閏四月朔日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿 別帳上下付、多田采男えは致直達候

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿 被得其意、飯米等先規之通可被得心候

高崎翼殿 別帳之通被仰付候間、先規之通夫々可被申渡候

差人

公役

御巡檢使御下向ニ付、町ヨリ差人差出候儀夥數候付、此場何分繰合を以、御用滞ニ不相成様可被差出旨蒙御達奉畏候、差人公役相勤候者之儀、新ニ申上迄も無御座、当時被官、当時別宅之者は年々四日之公役相勤、人数高御帳面前之通御座候、其内ニは老幼難病等有之、現ニ公役相勤候者少く、先年以来ヨリ両殿様御名代御代参等を初、其外不時之差人被召仕方多く、年中之差人差出候高、參百六拾人ニも相成難繰合訳を以、依願年ニ九錢百匁ツ、御差足銀被成下置、御陰を以是迄仮成ニ相償無御間欠様相勤罷在候程之儀ニ御座候得は、当節御巡檢使ニ付て之差人いかに繰合候ても手当全ハ相成不申、心痛此事ニ奉存候、差人之儀は若党、草り取、鏈挟箱持等之事故、誰ニても雇入不相成候付、右之当時被官、当時別宅、当時町宅抔之者公役手透之者共を成丈雇入可申ヨリ外、仕道無御座、此人数凡式拾人計ニ見積り、則御帳面前之公役人、名前書拔帳相添奉入御覽候、尤右等之者共内ヨリ若御組体御雇勤、当時番手等ニ被召抱候時は、夫丈人数も相減、忒拾人ニ相成不申段勿論ニ御座候、扱又雇賃之儀は、一日九錢式匁、夜ニ入四ツ時前は同五分、四時過候得は忒匁、夜白被召仕候節は夜も忒匁、木坂・黒瀬・小茂田・内

雇賃

六拾人之不足

山、其外田舎御名代御代參、府内迎も同様、以前ヨリ賃錢相払来申候、此節御入用之差人、御着発等其度毎一日、八拾人と見候得は、右式拾人を手当仕候時、今六拾人之不足と相成申候、就夫郷夫被召仕方御多端之御事とは、奉恐察候得共、外二変通之方便全く無御座候、不得止事御嘆願奉申上候、何卒此分訳官御形を以郷夫被召仕被成下、賃錢之儀、前之式拾人と共々、一日壹人ニ付九錢壹匁五分ツ、上ヨリ被成下、五分ツ、之御差足は町銀ヨリ被成下候様奉願上候、尤府内は素り田舎付廻之差人、都て夜勤ニ相成候歟、又は夜白被召仕候事ニ御座候ハ、前ニ申上候通之割合を以夜賃被成下候様、是又奉願上候、乍恐御時体柄も被為違候御中、可成丈は御出方筋ニ不相成様、此場別て心配不仕候て難相叶儀勿論ニ御座候得共、先達て御勘定御筋ヨリ被仰上之御書面之内、差人壹人一日之雇銀六錢八分、夜賃四分之御定ニては、以前と違、米穀ハ素り其外共ニ高直之時節、右式拾人之者共雇入方相談難相組、不得止事此儀奉願候、其内郷夫賃錢之儀は強て訳官之節之通ニ被成下候様ニは難申上、何れ共思召次第被成下度奉存候、右之事情何分宜被為聞召分、願之通被仰付被成下候ハ、差人之備相立有難仕合奉存候、若左様被仰付候時は、御巡検使ニ付、所々より人夫雇入多キ中ニは有之、外二雇入候儀心当更ニ無御座候、乍恐何分願之通被仰付被成下候ハ、差人差配御用無滞相動難有可奉存候、尤差人御入用之度毎、壹日之見積不相分候得共、右申上候通、八十人之外ニ御入用之節も可在御座候哉、其節は御用欠ニ不致様郷夫之御備被成下候様、是又奉願候、此段偏奉願上候、以上

人夫雇入

窮民差引役

三月

平山平七

御町会所

御付紙

人配  
町用銀

見届候、公役人少く人配六ヶ敷由、其筈之事候、依て不足人数六拾人と見て、忝人前銀弍弍式分五厘ツ、上ヨリ御渡可被下、其余は町用銀を以償可申候、附人雇賃銀時勢ニ随可令難儀候得共、是迄御巡検使之度毎相覚居候儀と申、即今御練合御大切之場ニ付、何分諭達、当用不差支様出精方可被申付候、時勢諸品高直難儀は上下同様之儀ニ候得共、先承届候、以上

四月廿一日

田嶋左門右衛門

杉村右馬助

町奉行中

御勘定奉行所

可被得其意候

駕籠昇郷夫

御巡検使御駕籠昇郷夫、府内にては一日忝人銀一匁五分充、田舎附廻は一日忝人銀弍匁二白米壹升充、中馬口取は壹日銀弍匁弍分充被成下、且右馬助駕籠昇夫六人并御用達・御郡奉行・人馬下知役口付五人、都合拾忝人は、中馬口取之通、一日忝人銀弍匁弍分充被成下候間、得其意、

先規之通可被取計候、以上

閏四月二日

杉村右馬助

古川将監

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

早田安賀之介殿

中馬

御郡馬

御巡檢使御滞留中、万一非常之儀御座候節は、先規御馬方ヨリ中馬六疋差出候儀ニ御座候処、  
当節中馬壹疋之外差出不申候由、依之右中馬之儀、浜出馬、又は御郡馬を以手当方役談仕申候  
間、右之節御郡馬五疋罷出候者、早速人馬方え牽出し候ハ、御都合宜相見申候、右之通被仰  
付候儀ニ御座候ハ、御郡奉行所、御馬方共ニ御達被成下置候様奉伺之候、以上

閏四月二日

早田安賀之介

田嶋所左衛門殿

御付紙

申出之通被仰付候間、猶又被申談、非常之儀有之節、間筈能手当方可被相心得候、以上

御茶屋

水茶屋

閏四月二日

杉村右馬助

古川将監

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

島居正左衛門殿

早田安賀之介殿

御巡検使三方より諸般寛政年之通、今度も御嚴重之被仰出も有之、然二田舎御通路、所々御茶屋之儀御馳走体二相当候唱は不宜、其上龜体之御取設ニ付、是迄之唱方不都合ニ相見候、当節ヨリ水茶屋と唱候様可被相心得候、此旨掛之役々末々至り、閏之筋々えも可被相達置候、以上

閏四月三日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

火消番

高崎翼殿

御用達中

早田安賀之介殿

佐治英之丞

右は御巡檢使二付、火消番被仰付置候処、病氣依願被差免候

木寺雅之介

右は御巡檢使二付、火消番佐治英之丞為代被仰付候

高瀬茂左衛門

右は国分嘉右衛門為代、御巡檢使久田村仮番所詰被仰付候

国分加右衛門

右は御巡檢使二付、人馬方手代被仰付置候処、病氣依願被差免候

中村郡右衛門

右は御巡檢使二付、人馬方手代国分加右衛門為代被仰付候

飯野安右衛門

右は小田清藏為代、御巡檢使二付、人馬方手代被仰付候

御勘定手代

鳴井儀左衛門

府内売物方

右は府内売物方え立会致証印候様被仰付候

小田清藏

右は御巡検使二付、人馬方手代被仰付置候処、病氣依願被差免候

御茶道

中嶋長意

築城春意

同助勤

清野嘉朴

御宿茶具

右は御巡検使御宿、三軒台子飾被仰付候、尤春意儀、田舎御宿茶具為飾御付廻をも被仰付候、

以上

閏四月三日

御雇三人

御厩組之儀、当村居合式拾壹人御座候処、此節上使田舎御下二付拾壹人被召仕、御着船、御上船、田舎御往来之節々、御府内え所々拾人被召仕二相成、此御役所当番者ヨリして無御座候、依之近比御事体柄恐多奉願事御座候得共、上使田舎ヨリ御上府迄御雇三人被召抱被成下候様、偏奉願候、以上

四月廿八日

御馬方

御付紙

見届候、御雇三人可被申付候、以上

閏四月三日

杉村右馬助

古川将監

島居正左衛門殿

御勘定奉行所

可被得其意候

府内

府内ヨリ大山村迄

五里拾九丁

本馬百三拾三文

辛尻八拾八文

出駕籠式百六拾五文

人足六拾六文

大山村

大山村ヨリ佐賀村迄

五里参拾参丁半

本馬百四拾式文

辛尻九拾五文

出駕籠式百八拾五文

人足七拾壹文

佐賀村

佐賀村ヨリ琴村迄

四里式拾丁

本馬百九文

辛尻七拾三文

出駕籠式百拾八文

人足五拾五文

琴村

琴村ヨリ豊村迄

五里三拾四丁

本馬百拾三文

辛尻九拾五文

出駕籠式百八拾五文

人足七拾壹文

豊村

豊村ヨリ深山村迄

六里壹丁半

本馬百四拾五文

辛尻九拾七文

出駕籠式百九拾文

人足七拾式文

深山村

深山村ヨリ仁田村迄 参里三拾四丁

本馬九拾五文

辛尻六拾三文

出駕籠百八拾九文

人足四拾七文

仁田村

仁田村ヨリ鶏知村樽之浜迄

四里三丁

船渡、村船老艘二付、借り賃三百式拾四文

鶏知村

鶏知村ヨリ府内迄

式里式拾式丁半

本馬八拾壹文

辛尻五拾四文

出駕籠百六拾式文

人足四拾文

右之通、相極候間可被得其意候、以上

閏四月四日

杉村右馬助

古川将監

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

早田安賀之介

八百屋直段

八百屋直段、諸色直段、魚直段、田舎水茶屋諸色直段、別帳四冊之通被仰付候間、可被得其意候、以上

閏四月四日

杉村右馬助

古川将監

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

船改頭役・佐役中

別帳略之

銀三枚

吉弘令庵

銀二枚

妻瀬正斎

蜜蠟三斤 膏藥調合用

右は御巡檢使御用田舎御付廻共被仰付候付、菓種為調用、先格之通被成下候、以上

菓種

閏四月四日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

御持筒郡藏代

御道具 惣八

御旗六兵衛代

同組 久兵衛

右馬措

御道具惣八代

御持筒 八十八

御馬方

御厩小頭

同組久兵衛代

御旗

善左衛門

右之通申付候、以上

閏四月四日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

以手紙令啓上候、御巡検使田舎御付廻御厩組、左之通御座候間、滯米之内ヨリ御借渡ニ相成候由ニ付、御手数之通、今日ニも御付出被下度存候、此段為可申述如是ニ御座候、以上

閏四月四日

御馬方

御勘定奉行所

御厩小頭

傳兵衛

善八

吉介

傳右衛門

直五郎

熊平

善吉

文右衛門

虎七

ノ九人

下目付

田舎御付廻御年寄申付 市左衛門

同組

市兵衛

喜兵衛

田舎売物方

右は御巡検使ニ付、田舎下申付候、売物方ヨリ御賄方、御料理方兼申付候、以上

閏四月朔日

御勘定奉行所吉田大臈

口上手控

田舎御付廻

駕籠

私儀、御巡検使御用聞、且田舎御付廻をも被仰付奉畏罷在候、然処田舎御付廻は先々駕籠ニて御供仕候由之処、私儀駕籠所持不仕、火急之儀差掛用意仕候儀相叶不申、当惑之次第御座候、依之近比恐多奉願事御座候得共、何卒従上駕籠御借渡被成下候は難有仕合可奉存候、此段宜被仰上、願之通被仰付被下候様御執成奉頼候、以上

府内売物方

閏四月二日

吉弘令庵

御組頭中様

願之通、安駄駕籠壹挺御貸渡被下候、以上

閏四月四日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

御徒士目付

内野半右衛門

右は御巡検使ニ付、府内売物方え被相付置候処、被差免、御用之品ニヨリ田舎田舎御付廻被仰付候

下目付

式人

右は半右衛門え被相付候、以上

閏四月四日

御勘定奉行所樋口亘理

田舎売物方

下目付

市右衛門

右は御巡検使二付、田舎御付廻、御年寄中付申付置候処、差免、同組喜兵衛為代田舎売物方え相付候様申付候

同組

喜郎衛

右同断二付、田舎売物方相付候様申付置候処、差免、同組市右衛門為代御年寄中付申付候

同組

源作

右は御賄方引切勤申付置候処、田舎売物方相付候様申付候、尤御賄方之儀は、諸方え召仕置候内より繰合を以相勤候様申付候

右之通申付候間、御渡被下、先格之通夫々御渡可被成候、以上

閏四月四日

御勘定奉行所吉田大臈

以手紙令啓上候、下目付市兵衛・市右衛門・源作、田舎売物方え相付候様申付置候処、右売物方え関候役々、近日御借船を以被差下候哉二相聞候間、右之者共同様被差下方之儀差図有之度存候、尤下目付勤障之節は、御賄方・御料理方え立廻候様申付候間、尚以其筋えも御達被成度

遠目鏡

存候、此段為可申述如是御座候、以上

閏四月四日

御勘定奉行所吉田大臈

御巡檢使御迎、御用達乾一郎兵衛え御付被下候町書手之儀、町人楠本屋廣治申付候間、急便船承り立、早々勝本え差越候様可被取計候

右御口達書、右馬助殿ヨリ

御関所御備、遠目鏡壹本、為修補差登候分、修補方相達候処、御巡檢使御間筈能成就之程無、心元段申出候間、亀谷卯右衛門持合之遠目鏡壹本、御借上取計申候間、被差下方、其筋之御差図被成下候、尤御関所ヨリ差登来居候遠目鏡は、御修補次第差下可申候付、此節被差下候御借上之分は、御用濟次第差登候様御達被下度奉存候、以上

閏四月

御勘定奉行所

御付紙

申出之通承届候、亀谷卯右衛門より借り上候遠目鏡は、御先越之賄方役持下、御関所方え相渡候様可被取計候

閏四月五日

久田村  
道作

御巡檢使ニ付、久田道之儀道見分被仰付、既ニ今日御役々立会見分罷越居、然処打上坂ヨリ久田村迄之道作之儀、御家中屋敷は銘々ヨリ、其余は上ヨリ被成来候得共、宝曆年記面ニては、無用仕度と有之候付、寛政年ニは道作ニ不及相濟候段書留有之、此節も道作ニ不及相濟可被成哉、奉伺之候、以上

戊閏四月

吉村儀右衛門

藤正左衛門

御付紙

久田道

久田道通ヨリ久田村迄之道筋、御巡檢使御通行無之候共、御家来以下之往還在之候間、格別見苦敷候ては、向難閣所は見計取繕候様、夫々可被相達候、以上

閏四月五日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

大坂注文

早田安賀之介手控被成御渡披見仕候、御巡検使田舎御付廻役中并組中都合拾式人、先規矢立御貸渡被下候付、当町調ニして御渡被下候様ニと書面ニ相見申候、就夫願面ニも有之候通、先規御貸渡相成居候付、手当いたし不置してハ難叶儀ニ御座候得共、諸品大坂注文不相揃候付、損料借を以相償方及役談居候処、纒之日間ニは高料ニ相見候付、同下方々々役談ニ及候処、示談折合兼申、右様多端預出ニ相成、最早御着船日間も無之候付、申出之通損料借を以自分ニて相償候様可被仰付哉、尚何れとも御賢意次第奉存候、以上

閏四月

御勘定奉行所

御付紙

申出之通、損料御渡被下候間、可被得其意候、以上

閏四月五日

御刀掛

上使仁位御泊之節、御船ニて茶、多葉粉盆、御刀掛、御手掛等差廻方之儀、御乗船ニは御付廻、御賄掛等乗組不申儀ニ付、右品々相預候儀は御船頭中御船手乗組之儀ニ付、御船奉行所ニ相請取差廻方相委方御役談仕見候へ共、御船手之儀は多端之儀ニ付差廻方迄手届不申、御船頭中へ被相委候御事ニも御座候得は、御手筋ヨリ御達ニ相成候様ニ取計方申来、然処此節御茶道方御付廻被仰付候儀ニ付、諸品は御船奉行所へ相渡置、差配方は御茶道方ヨリ相勤候様被仰付、如

御茶道方

何可有御座候哉、御先例何方ヨリ差廻候儀哉書留ニ不相見、尤寛政年ニも御茶道方は、御付廻不被仰付置儀ニ付、此節も上使御方御様子ニ依御茶道方為御引取被成候節は、右之通御船ニは外人乗組不被仰付儀ニ付、御船中ヨリ差配仕候様可被仰付候哉、尚筋々御吟味被仰付、御先例差廻来候、御役目之人も御座候ハ、差掛御不都合ニ不至様被仰付置、如何可在御座候哉、右御役所ニて吟味相届不申候付、奉伺之候、以上

戊閏四月

吉村儀右衛門

藤正左衛門

御付紙

見届候、仁位渡御召船下知役、大小姓より三人被仰付来候処、寛政年之度被相省、御船改へ被相委候事故、書面之品々当節も御船頭差配之事候、依之心得方之為、宝曆年御巡檢使之節、御召船下知役ヨリ之書記録拜見可被仰付候間、書札方承合候様、仁位渡り御船頭え可被相達候

閏四月五日

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

高崎翼殿

箕原九八郎殿

御用達中

早田安賀之介殿

御座飾

御巡檢使ニ付、田舎御宿々御座飾として、御茶道一人被差下候段被仰付候、然処寛政年ニは不被差下候付、滯米、且旅籠飯米御定無之、此節は紙末之通御渡可被下候哉、奉伺之、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

閏四月

御勘定奉行所

一、滯米、忝俵八升忝合参勺参才

一、上下旅籠付飯は、御徒士之通ニして

御付紙

書面之通可被相渡候

閏四月五日

売用餅

田舎水茶屋々々ニて、売用餅之儀、寛政年忝ケ所式斗五升搗、御用意ニ相成居候得共、不足ニ有之、不宜振合為有之と相聞候付、此節御用意方相増候様被仰渡候付、倍增ニして五斗搗ニ可

被仰付候哉之段御伺申上候処、其通用意被仰付置、則用意罷在、然処五斗搗と申候ては、餅數も多數有之、左様迄御手当二も及間敷相見、尤茶屋場一二ヶ所減申候ハ、御用意方之見計も出来可申候得共、是迄式斗五升突二て相済来居候儀二付、今壹斗相増、壹所二て參斗五升搗と相立、御用意被仰付置候ハ、餅米は為持越、尚相試候上増減方見計之儀は、付廻御勘定手代、御賄方掛えも相合、御不合之振合二不至様為取計、如何可在御座候哉、尚何れ共御賢慮次第御達可被成下候、以上

戊閏四月

吉村儀右衛門

藤正左衛門

御付紙

書面之通可被致候

閏四月四日

田舎売物方

田舎売物方付申付置候処

下目付

差免、御付廻御年寄中付申候

市右衛門

御付廻御年寄中附申付置候処

同組

差免、市右衛門為代、田舎

喜兵衛

売物方え相附候様申付候

右之通申付候条、左様御承知被成度存候、以上

閏四月五日

御勘定奉行所吉田大臈

木賃

御巡検使御賄之儀、隣国筋之問合未申来候処、最早不具も御下着可成候故、木賃にて左之通御極被置候、尤其内隣国問合申来候上、相違之儀も候は其節可相達候、右之段得其意、夫々可被申渡候、以上

閏四月五日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

田舎賄役可被申渡候

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

覚

一、上中下無差別、都て一汁一菜

但、仕立にて差別可在之事

一汁一菜

一、錢拾貳文  
魚菜代

但、塩味噌代

一、同六文  
木賃

一、同貳拾參文  
米代

ノ錢四拾壹文

御朝夕

合錢八拾貳文  
上之分

一、錢八文  
魚菜代

但、前同斷

一、同六文  
木賃

一、同貳拾參文  
米代

ノ參拾七文

朝夕

合錢七拾四文  
次之分

一、錢參拾五文  
上老入分弁当

内六文  
木賃

同六文  
菜代

弁当

魚菜代

同式拾参文

米代

一、同参拾五文

次壺人、右同断

内六文

木賃

内三文

菜代

同式拾参文

米代

以上

火消番所

火消番所、波戸番所詰組中之儀、来七日より相勤候様申付候、久田仮番所組中之儀は、田舎御上府前日より相勤候様申付候間、入用之諸品例之通差図可被致候、以上

閏四月五日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

水茶屋

水茶屋亭主中ヨリ願出之品ニ依、年行司ヨリ申出之書面披見仕候処、水茶屋壺ヶ所壺人勤ニテ請兼候付、手伝下役壺人充御増被下、賃銀・飯米代とも壺日銀参匁四分式厘御渡被下候ハ、自分ニテ相雇御用滞なく相勤可申と之趣ニ相見、御一行多人数之儀ニ付、壺人ニテは凌兼可申儀ニ付、願出之通下役壺人御増可被下哉、就夫右賃銀之儀は町ヨリ出銀を以可相勤筋と奉存候得共、当時市中零落之儀ニ付ては、取立銀等相届申間敷候付、飯米代壺人前銀壺匁壺分七厘従上被成下、賃金之儀は、町用銀ヨリ相償候様被仰渡、如何可有御座候哉、尤七曲水茶屋ニテ売

町用銀

用餅、搗入料銀拾七匁六分七厘は、従上被成下候ニして、紙末之通ニ相成申候間、いつれとも被仰渡被成下候、以上

戌閏四月

吉村儀右衛門

藤正左衛門

水茶屋

一、銀參百五拾九匁壹分

水茶屋々々之亭主手伝下役者人雇賃、壹日銀參匁四分貳厘二人數七人、日數十五日分賃渡にして、如斯

○ 内百貳拾匁八分五厘

但、米代者人銀壹匁壹分七厘、七人分、日數十五日ニして従上御渡可被下候分、如斯  
残銀貳百參拾六匁貳分五厘

賃銀

賃銀者人貳匁貳分五厘、七人分、日數十五日ニして町用銀ヨリ御賃渡可被下分、如此

○ 外二、銀參拾五匁參分四厘

七曲水売

但、七曲水売茶屋ニて売用餅搗入料、壹度銀拾七匁六分七厘、兩度分如此、上ヨリ被成

下候ニして

丸印貳口、メ銀百五拾八匁壹分九厘

但、此銀高、上ヨリ御渡被下候ニ当り候事

日数十二日

猶以申上候、申出之日数十五日分ニ付、右之通相成候得共、明六日差下、上使之儀此程御用達ヨリ申来候積通、風順宜御通船、此元御着岸八日と相見、九日府内御逗留、十日田舎御発駕と相成候得共、御定式御巡檢之積合ニ仕候得は、十七日ニは御上府ニ相成候積合ニ付、日数十二日と相成、然上水茶屋亭主之儀つるさ口上ノ原相勤候人は、十三日切ニて勤前相濟申し候事故、十五六日迄ニは上府可仕候分は、日数十日又は十一日ニて、勤終候儀ニ付、過上仕候分は、上納可仕段勿論ニ御座候得共、其段嚴重ニ相心得候段、年行司ヨリ相達置候様御達被下度奉存候、以上

御付紙

書面之通可被相心得候

閏四月五日

御徒士目付

内野半右衛門

宿一軒

上下式人

乗馬壹匹

荷馬壹匹

田舎御付廻

下目付二人

荷馬壹匹

式人中

御茶道

築城真意

同一軒

上下式人

乗馬壹疋

荷馬壹匹

御用両掛

持夫式人

右は御巡檢使田舎御付廻被仰付候、夫々可被申渡候、以上

閏四月五日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御渡着

御巡検使御渡着、翌日御三方様御旅宿へ公儀御様体為御伺、若殿様御出被遊候、就夫御行列之儀、江戸御地歩行之通可被仰付候得共、御時勢之違も有之、人配も六ヶ敷、旁御行粧御省略被成、且御供一体都而綿服、尤御往還御道繰、御行列共別帳之通ニ候条被得其意、関之筋々之可被相達候、以上

閏四月六日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

中御形

御用人中

大目付中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

島居正左衛門殿

三輪佐右衛門

右は鶴岡茂兵衛為代、御巡検使御家中衆御先番として、揚陸有之節手引被仰付候

鶴岡茂兵衛

御先番

右は御巡検使御家中衆御先番として、揚陸之節手引被仰付置候処、病氣依願被差免候、以上

閏四月六日

樋口亘理

御勘定奉行所

内野門兵衛

右は御巡検使御宿番被仰付候処、病氣依願被差免候

山崎竹七

御宿番

右は橘小熊為代、御巡検使二付御宿番人被仰付候

鶴岡茂兵衛

右同断、内野門兵衛為代、被仰付候

加島多人

火消番

右は浅野文作為代、御巡検使二付、火消番被仰付候、以上

閏四月六日

御勘定奉行所樋口亘理

御旗

御巡検使御付廻り

源七

足輕

杉村右馬助殿附人

松右衛門

右之通申付候、以上

閏四月六日

御勘定奉行所樋口亘理

内野門兵衛

右は御巡検使御宿番被仰付置候処、病氣依願被差免候

山崎竹七

右は橘小熊為代、御巡検使二付御宿番人被仰付候

靄岡茂兵衛

右同断、内野門兵衛為代被仰付候

賀嶋多人

右は浅野文作為代、御巡検使二付、火消番被仰付候、以上

閏四月六日

樋口亘理

御勘定奉行所

下目付御雇

直治

直右衛門

御付廻

右は御巡検使御付廻、御徒士目付内野半右衛門之相附候様申付候、以上

閏四月六日

吉田大臈

御勘定奉行所

御巡検使御付廻

御旗 源七

杉村右馬助殿附人

足輕 松右衛門

右之通申付け候、以上

閏四月六日

樋口亘理

御勘定奉行所

金相場

去ル四日相達置候穀物金相場、隣国問合之趣申越候付、当節左之通相改候間、可被得其意候、以上

閏四月七日

杉村右馬助

古川将監

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿、

金	木綿	上酒	白米	
一、金壹両二付代	一、木綿壹反二付	一、上酒壹升二付代	一、黒米壹石代	高崎翼殿 早田安賀之介殿 船改頭役・佐役中
同 百拾壹匁六分六厘六毛	同 貳拾六匁五分	同 四匁貳分九厘參毛	同 百九拾貳匁五分六厘六毛	
	貳拾八匁貳分六厘六毛	同 參匁七分六厘六毛	同 百四拾四匁八分六厘六毛	
		同 四拾五匁九分參厘六毛	同 百貳拾壹匁九分	
	四拾七匁七分	同 拾九匁四分參厘參毛	同 四匁壹分六厘六毛	
		同 拾九匁四分參厘參毛	同 四匁壹分六厘六毛	
		同 四匁貳分九厘參毛	同 四匁壹分六厘六毛	
		同 參匁七分六厘六毛	同 四匁壹分六厘六毛	
		同 四拾五匁九分參厘六毛	同 四匁壹分六厘六毛	
		同 四拾七匁七分	同 四匁壹分六厘六毛	

一、同耆兩切賃代 拾六文

以上

春澤龜之丞

右は御巡檢漕船下知被仰付候処、被差免、御宿番人神宮哲助為代、被仰付候

大目付書手

吉野官兵衛

打它重右衛門

右は御徒士目付則二付、御巡檢使御在留中助勤被仰付候、重右衛門儀は、御巡檢使田舎御往還御通筋行規人被仰付候

御徒士目付

三井好右衛門

右は内野半右衛門為代、府内売物方之被相付候

同仮役

佐治与八郎

右は三井田好右衛門為代、田舎御往還之節、御先立行規人被仰付候

神宮哲助

府内売物方

右は御巡検使二付、御宿番人被仰付置候処、病氣願ニより被差免候

閏四月七日

御勘定奉行所樋口亘理

下目付御雇

直治

直右衛門

右は御巡検二付、御徒士目付内野半右衛門、田舎御附廻被仰付候間、右之者共相附候間、御渡物等御差図被成度存候、以上

閏四月七日

御勘定奉行所吉田大臈

仁位村御本陣

仁位村御本陣之儀、社人長岡可然方三番二相当居候を御止被成、給人平松登藏方え御仕替御普請御成就ニ至候処、家之内構廻に至、一体宜敷相成候由御座候間、此節二番之御本陣と御振替被仰付、下宿も附廻繰替被仰付、如何可有御座候哉、奉伺之候、何れとも被仰出被下度奉存候、此段為可申上如斯御座候、以上

閏四月五日

御勘定奉行所

古川将監様

杉村右馬助様

御付紙

書面之通御宿振替被仰付候、以上

閏四月六日

杉村右馬助

古川将監

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

口上手控

火消番

我々儀、御巡檢使火消番被仰付置畏奉罷在候、然処着服之儀は、素り格分之行粧ニ至り勝手次第と被仰付置候得共、当節ハ火消番御番所之儀、御旅宿近辺ニ御設被置候付ては、別て他所人之見聞も有之、若心得方区々ニ相成候ては、折角無御手抜御取被成候非常御備之御主意も難相立候へは、御見掛も不宜可有之、我々ニ至ても甚以残心奉存候、夫ニ付勝手次第と被仰付置候上ながら、此場之詰何分銘々之覚語を以て御見掛宜様出精仕、壹候ニても召連相勤候様、衆議仕罷在候、然処元来不如意之我々、平素家来召仕不得勝ニ有之、乍残念自僕ニて相勤候儀、手付得不申、誠以当惑千万奉存候、依之近比不容易奉頼事御座候得共、何卒別段御賢慮を以、我々壹人ニ付借夫壹人ツ、御借渡被成下候様被仰付候ハ、御蔭を以仮成ニ相勤難有仕合可

借夫

奉存候、此段何分宜被仰上、願之通被仰付被下候様、御執成偏ニ奉頼候、以上

閏四月二日

火消番中

小茂田貫介

立花近介

熊生弥五六

樋口織太

陶山五左衛門

小田哲之助

俵郡左衛門様

浅井与左衛門様

俵数馬助様

御付紙

供夫

願之通無余儀相問候得共、当節人夫之召仕、数多之儀如何ニも繰合不相成候付、惣中ニ供夫六人御渡被下候間、其余自分ニおひて相償候様可被相達候、以上

閏四月五日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

得其意、町作事方御郡ヨリ兩人ツ、可被可被相渡候

藤正左衛門殿

高崎翼殿

小島宇内

右は御巡檢使二付、御使者被仰付候処、病氣依願被差免候

井上左衛門

右は御巡檢使御使者被仰付置候処被差免、從若殿様之御使者被仰付候

幾度六左衛門

右は左衛門為代、從殿様之御使者被仰付候

山本勘治

右は御巡檢使二付、久田村仮番所詰相良條左衛門為代被仰付候、以上

久田村

閏四月八日

御勘定奉行所樋口亘理

駕籠

口上手控

私儀、巡檢使御附廻被仰付候処、火急之事故、手前にて駕籠相調候儀難相成候間、何卒御借渡被成下候は、難在仕合可奉存候、右等之趣何分宜御聞通被成下、願之通被仰付被成下候様奉願候、以上

閏四月六日

妻瀬正斎

御与頭中様

御付紙

大坂注文

見届候、大坂注文之品々を以不下来候間、御家中・市中ヨリ諸品被借上、不都束ながら御当間ニ合候程之儀ながら無余儀相聞候付、御借上之内、早出申安駄御余分在之候間、御貸渡可被下候、此旨可被相達候、以上

閏四月八日

杉村右馬助

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

口上手控

私儀、此節御巡檢使御用聞、且田舎御附廻ニ付、米参俵御手当被成下難有奉存候、然処御馬廻勤之儀は、旅行諸勤ニも多少之間白米ニて御渡被成下候御事之由、尤寛政年右同様相勤候人々、何れも大小姓中より相勤居候付、右之例を以、米参俵此節迎も被成下候御事共哉と奉存候、御時体柄彼是申上候儀奉恐入候得共、御馬廻大小姓勤之御渡前可被成下候事ニ御座候ハ、何卒白米参俵ニて御渡被成下候ハ、難在仕合可奉存候、此段宜被仰上願之通被仰付被下候様御執成奉頼候、以上

閏四月六日

吉弘令庵

御組頭中様

御付紙

見届候、事情無余儀相聞候付、当時之御勝手向なから白米参俵ニて御渡被下候候、此旨可被相達候、以上

閏四月八日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

可被得其意候

藤正左衛門殿

金相場

穀物、木賃、金相場等追々相達置候処、今度筑前御領承合候処、申越候付、当節別帳之通相改候間、得其意夫々可被申渡候、以上

閏四月九日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

早田安賀之介殿

船改頭役・佐役中

一汁一菜

上下無差別一汁一菜之御賄

一、木賃拾弍文 掛紙、御弁当は半賃二候事

一、白米五合 代銀五拾七文

一、菜代拾五文

但し宵、朝

諸色直段

諸色直段

一、白米壹石二付

代、正銀百拾貳匁六分

六錢ニして、百八拾貳匁參分五厘八毛

一、黒米壹石二付

代銀九拾九匁六分

六錢ニして、百七拾匁壹分五厘

大豆

一、大豆壹石二付

代同九拾八匁

六錢ニして、百六拾七匁四分壹厘六毛

一、大麥壹石

代同百匁

六錢ニして、百七拾匁八分參厘參毛

一、小麦壹石二付

代同九拾五匁六分

六錢ニして、百六拾參匁三分壹厘六毛

小豆

一、小豆壺石二付

代同百匁

六錢ニして、百七拾匁八分參厘參毛

一、味噌壺貫目

丁錢參百貳拾四匁

一、醬油壺斗二付

同壺貫百參拾四匁

一、上酒壺升二付

同貳百七拾五匁

一、中酒壺升二付

同貳百四拾參匁

一、下酒壺升二付

同貳百貳拾七匁

一、晒布壺反

代正銀貳拾四匁參分

六錢ニして、四拾壺匁五分壺厘貳毛

木綿

一、木綿壹反二付

代同拾五匁六分

六錢ニして、式拾六匁六分五厘

金銀錢

金銀錢兩替値段

一、金壹兩二付

代同五拾八匁四分

六錢ニして、九拾九匁七分六厘六毛

一、銀壹匁二付

丁錢百弍文五歩

一、金壹兩二付

同五貫九百八拾六文

一、同、壹兩二付

切賃拾弍文

以上

博多

博多え被召仕置候川邊一角ヨリ御隣領問合之趣、紙末之通申越候間、可被得其意候、以上

閏四月九日

杉村右馬助

古川將監

曾我又左衛門

田嶋所左衛門殿

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

早田安賀之介殿

曾我又左衛門様

総人数 三十九人

内式人 御用人

同三人 給人

池田乙右衛門、岡真平

一、具足箱 壹棹

一、乗物 壹挺

一、両掛 四荷

一、茶弁当

一、竹馬 貳荷

一、提灯笼 壹荷

大久保勘三郎

一、長持 参棹

一、挟箱

一、供駕籠 参挺

大久保勘三郎様

総人数三十三人

内式人 御用人

同式人 給人

同一人 勝手方

一、具足櫃 壺棹

一、乗物 壺丁

一、茶弁当 壺荷

一、両掛 四荷

一、合羽籠 参荷

一、提灯笼 壺荷

一、長持 式棹

一、挟箱

下澤喜多録、安東善右衛門

近藤勘七郎

一、供駕籠 式丁

一、供鐘

近藤勘七郎様

惣人数 三十二人

内二人 御用人

内二人 給人

桑原栄蔵、小野東馬

一、具足櫃 壹棹

一、乗物 壹挺

一、茶弁当 壹荷

一、両掛 式荷

一、合羽籠 参荷

一、竹馬 式荷

一、長持 参棹

一、供駕籠 式丁

一、供鐘

以上

久田村

相良條左衛門

右は御巡檢使御下向二付、久田村仮番所詰被仰付置候処、病氣依願被差免候、以上

閏四月九日

御勘定奉行所多田采男

馬・人足

以手紙申達候、田舎御用意方積入之船通船不相成と相聞候付、大山村御入用丈陸ヨリ差下候様、於御郡奉行所、馬參拾疋、人足三十人明早朝、南宝村迄差出候筈ニ付、右之人馬を以必用之品々而巳早々差下候様可被取計候、尤御用掛之手代内夫は賄掛下代召連、南宝村え罷越、品々成丈減数ニて、御用不相欠様撰分相待居候様可被達候、猶御郡足輕壺人差下方も相達置候、差掛候儀ニ付、御用便御用滞無之様、今夜中手当可被致候、為其如此候、以上

閏四月九日

古川将監

杉村右馬助

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

売物方

尚々、売物方之品、両茶屋入用之分被差越候ハ、仮成二手当可相立哉、人足之繰合此上ハ決して不相成、本文之三拾疋三十人は、右積入之船々漕船之手ヨリ差出候得は、跡漕船も六ヶ數事故、尚又早々入替等之計を以、御用便宜可被取計候、以上

波戸御番所

鉄砲五丁

我々儀、御巡檢使ニ付、則波戸御番所詰被仰付置、昨七日罷出、諸端不都合無之様手配仕置候段御達ニ付、御飾道具等をも夫々差配をも仕候処、究候御場所ニて、兼て御治定之通、張弓五丁、御筒五丁ニてハ至て乏敷御見掛も不宜、衆議仕候候付、別段鉄砲五丁御増御飾ニ相成、如何可有御座候哉、尤諸方御飾御用ニ相成居候得は、今五丁外之御有合有之間敷候趣伝承仕候間、若御差支之訳迎も無御座御事ニ御座候ハ、外ニ拾匁筒ニても御飾ニ相成候様奉伺候、右之趣宜敷被仰上、何れ之道ニも御差凶ニ至候様偏奉希候、以上

閏四月九日

波戸御番所

御付紙

見届候、御在合大小御筒相当之御品、見計を以五丁飾増被仰付候、此旨被相達、夫々用意可有之候、以上

閏四月九日

杉村右馬助

古川將監

田嶋所左衛門殿

原四郎左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

繩網船

御巡檢使御用肴、繩網船壹艘にては行届申間敷、申出之品ニ依、今壹艘相増、都合式艘ニ被仰付候間、御用支不至様筋々可被相達候、差掛儀ニ付いづれも申談、都合能可被取計候、以上

閏四月十日

杉村右馬助

古川将監

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

御巡檢使諸御手当御用意之諸品、成丈匱末ニ不相成様、役々以下心を付御用済之上品計可差出候、尤不用御品々ニ至同断可申聞候

久田村飯番所御番組中六人、侍中同様久田村居込申付候、以上

閏四月十二日

御郡奉行所田嶋所左衛門

藤益之進

右は大浦五郎左衛門為代、御巡檢使ニ付火消番被仰付候

大浦五郎左衛門

久田村

火消番

右同断、火消版被仰付置候処、病氣依願被差免候、以上

閏四月十二日

御勘定奉行所多田采男

足輕甚右衛門代、馬指

御持筒 八十八

御持筒八十八代、御荷物宰段

足輕 幸左衛門

右之通申付候、以上

閏四月十二日

御勘定奉行所田嶋所左衛門

御印鑑

御巡検使御調物御印鑑之儀、於勝本御用達ヨリ相伺候所、御印鑑御渡被成二不及段御達有之候間、府内・田舎売物方御徒士目付え可被申渡置候、以上

閏四月十三日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

府内・田舎売物役、町人え可被相達候

藤正左衛門殿

御巡檢使田舎御發駕之儀、御着船翌日は御出立延引被下候様、於勝本御用達ヨリ相伺候処、致承知候と之御返答二付、被得其意、右之手当ニ被致、先格之通諸事無間違様可被取計候、以上

閏四月十三日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

仁位格兵衛殿

大目付中

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

御用達中

早田安賀之介殿

勝本御着

以手紙申達候、上使昨十二日未中刻、勝本御着之段、今日御渡海之程も難計候二付、諸御手当方猶又無油断手配可被相心得、為其如此候、以上

閏四月十三日

杉村右馬助

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

隣領問合

御着船

去ル九日、御隣領問合之趣相達候内、大久保勘三郎様御用人安藤善右衛門と相達置候得共、当節吉右衛門と御達有之候間、可被得其意候、以上

御巡検使御着船・御上船之節、波戸先御駕籠据所板敷候、其上ニ薄縁敷候様手当相成居候と相聞候得とも、板敷ニ不及、薄縁計敷候様可被致候

一、府内御宿々御駕籠据処、板計敷候様手当ニ相成居候と相聞、其通ニて不苦候

一、田舎御宿々御駕籠据処、役々用意も無之相聞候、板敷候ては只今ヨリ手入ニも可相成候間、薄縁ニては敷候様可被致候、若雨乞之節、水溜等ニて格別路地悪敷相成候ハ、下夕敷は時宜可被相心得候、以上

閏四月十四日

杉村右馬助

古川将監

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

可被得其意候

仁位格兵衛殿

幾度小四郎殿

御巡檢木賃、紙末之通被相改候間、可被得其意候、以上

閏四月十五日

杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

木賃

一、木賃 拾弍文

一、白米 五合 代錢五拾五文

一、菜代 拾五文

但、宵、朝

御弁当ハ半賃ニして

以上

弁当

諸色直段

先般相達置候諸色直段之内、当節紙末之通被相改候間、可被得其意候、以上

閏四月十五日

杉村右馬助

古川将監

焼酒

上白米

黒米

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

早田安賀之介殿

船改<sup>興役</sup>  
後中

一、黒米 壹升 代銀壹匁四分八厘

一、小豆 壹升 代同壹匁壹分

一、大豆 壹升 代同八分九厘

一、上白米 壹升 代同壹匁八分五厘

一、中白米 壹升 代同壹匁七分

一、大坂酒 壹升 代同五匁

九匁壹分参厘六毛を如此にして

一、諸白 壹升 代同三匁

三匁七分四厘壹毛を如此にして

一、焼酒 壹升 代同壹匁四厘

酢

- 一、荒麦 壹升 代同七分四厘
- 一、醬油 壹升 代同壹匁六分參厘
- 一、御前味噌 壹升 代同貳匁貳分貳厘
- 一、酢 壹升 代同壹匁四分八厘
- 一、小麦 壹升 代同壹匁四厘

以上

あいしらひ方

年寄中

御巡檢使御あいしらひ方ニ付、於勝本御伺御返答之品ニ付、此節左之通可被相心得候

- 一、年寄中之内、杉村右馬助一人

御巡檢使御宿ニ、御祝詞為伺御機嫌罷出候事

但、田舎御発駕之節、一ノ御門下へ古川将監罷出、御上府之節同所え小川丹下罷出、御

上船之節御旅宿三軒え右馬助一人相勤、尤其節之振合ニ依、波戸へ相勤候儀も可有之事

- 一、年寄中、田舎御附廻無用と有之候付、表向御附廻は無之、御巡檢御用ニて右馬助儀輕キ行粧ニて致下村、尤御旅宿え勤先無之積ニて、前日出立、上使一行ニ不込合様、早朝々々ニ出立候筈ニ候事

但し、佐須奈村御昼休ニて、伺御機嫌相勤候ニ候事

- 一、田舎御巡檢中、為伺御機嫌、年寄中ヨリ之飛札不及其儀事

田舎御附廻

御附廻馬医

御馬五疋

一、御着船御船揚、且田舎御附廻共、牽馬差出ニ不及候、依之田舎御附廻馬医、其外右ニ相携候役筋之者共、不及下村候事

一、御馬五疋之儀は、寛政年之通用意、人馬方え相渡候様可被取計候

一、御揚陸之節、御召用之御乗物、寛政之通不及御用意事

右之通相預候、筋々可被得其意候、以上

閏四月十三日

杉村右馬助

古川将監

田村所左衛門殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

島居正左衛門殿

早田安賀之介殿

中馬五疋

中馬五疋、寛政年御用意有之候処、御入用無之相見候得共、当節も先ツ寛政年之通御用意被仰付置、勝本ニおいて乾一郎兵衛ヨリ相伺候所、寛政度之通可被相心得旨被仰付置候付、中馬五疋相止候、尤御用達乾一郎兵衛駕籠御免被仰付置候付、是又不及用意候間、預之筋々可被得其意候、以上

金銭相場

閏四月十五日

杉村右馬助

古川将監

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

嶋居正左衛門殿

早田安賀之介殿

御巡檢使ニ付諸品金銭相場之儀、去ル七日相達置候内、金相場大坂ニテ上り候趣申来候付、紙末之通相改申候条、可被得其意候、以上

閏四月十五日

杉村右馬助

古川将監

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

早田安賀之介殿

船改頭役・佐役中

火消番

御宿番人

一、金壹両

文字銀六拾壹匁

丁錢六貫四百九拾六文五歩

六錢百八匁貳分七厘五毛

一、銀壹匁匁二付 丁錢百六文五歩

以上

山崎守之輔

右は樋口類右衛門被差免候、為代御巡檢使二付、火消番被仰付候

青柳又左衛門

右は人馬手代被仰付置候処、病氣依願被差免候

山崎竹七

右は御巡檢使御宿番人被仰付置候処被差免、青柳又左衛門為代、人馬手代被仰付候

田井直左衛門

右は山崎竹七為代、御宿番人被仰付候、以上

閏四月十六日

御勘定奉行所樋口彈正

（以下は次号に掲載）